

史 跡 福 山 城 XV

平成9年度 発掘調査概要報告

1998・3

北海道松前町教育委員会

序

史跡福山城は、安政元年に完成した最後期の日本式築城による城郭であり、三ノ丸に7座の台場を有す、我が国唯一の城郭であります。この城の保存管理については、文化庁・北海道の補助により昭和50年度に保存管理計画を策定し、環境整備に係わる遺構確認調査は昭和55年度以来実施し、今年度は第15次を数えるに至りました。これと同時に石垣の復元工事も進み、とりわけ外堀周辺は、徐々に城郭の姿を取り戻しつつあります。

さて、今年度は、追手升形と外堀の発掘調査を実施いたしました。その結果、福山城期の追手二ノ門・埋門・番所跡などや、福山館期の遺構が確認されました。とりわけ、追手升形の平面形が明確になったことで、この一帯の遺構の解明の糸口がつかめたところであります。今後、この史跡南東部一帯地域の環境整備に向けて、ますます意を強くしているところであります。

つきましては、これらの成果をもとに、史跡福山城が一日も早くいにしえに復することを願ってやみません。ここに平成9年度の発掘調査概要報告書を刊行するにあたり、本書がより多くの方々に活用されることを期待いたしております。

最後に、この事業を遂行するうえで、文化庁、北海道教育委員会をはじめ、関係機関、諸先生がたに多大の御指導御助言をいただき深く感謝を申し上げます。次第であります。

平成10年3月

松前町教育委員会

教育長 成 田 稔

例 言

1. 本書は、平成9年度に松前町が実施した史跡福山城環境整備事業に伴う遺構確認調査の概要を報告するものである。
2. 本調査は、平成9年6月から平成10年3月までの間、次の体制で実施した。
調査主体者：松前町教育委員会 教育長 成 田 稔
調査担当者・調査員： 調査係長 前 田 正 憲
調査事務局：松前町教育委員会文化財課
調査作業員：菊地亀太郎、能登谷健治、山本秀喜、赤松順子、浅見千恵子、小川三紀子、河田敬子、斉藤秋子、斉藤和子、齋藤雅子、佐々木紀子、佐藤美恵子、柴田誠子、堀かつ子、松川笑美、三浦文子、水田淑子、和田映子
3. 本書の編集、執筆、写真撮影は前田があたった。
4. 遺構実測図の整理・トレースは赤松があたった。
5. 遺物実測図の作成・トレースは河田、齋藤、松川、三浦、和田があたった。
6. 調査期間中、次の諸機関各位から御指導御助言をいただいた。

(敬称略、順不同)

文化庁記念物課：田中哲雄・本中 眞・磯村幸男、奈良国立文化財研究所：
加藤允彦、北海道教育庁文化課：竹永良美、昭和女子大学：平井 聖、神戸
芸術工科大学：近藤公夫、元国立史料館：浅井潤子、東京大学：渡辺達三、
札幌学院大学：桑原真人、札幌市立高等専門学校：大萱昭芳、東北芸術工科
大学：仲野 浩、北海道開拓記念館、佐賀県立九州陶磁文化館、有田町教育
委員会、愛知県陶磁資料館、瀬戸市歴史民俗資料館、(財)瀬戸市埋蔵文化財
センター

7. 調査に関する諸記録、資料は松前町教育委員会が保管する。

序	i
例言	iii
目次・挿図目次	iv
図版・表目次	v
I はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査の目的と成果	1
3. 調査の方法	3
II 調査結果	5
1. 出土遺構	5
1) 番所廻り	5
・番所	5
・暗渠関係	6
・築城時の造成	9
2) 追手升形廻り	9
・追手升形	9
・開渠	11
・暗渠	11

・追手二ノ門	15
・堀門、井戸	19
3) 外堀呑口	27
・外堀	27
・呑口	29
4) 遺構小括	31
・番所廻り	31
・追手升形廻り	31
・外堀呑口	32
2. 出土遺物	34
III 各種調査	38
1. 旧松城小学校解体古材再調査	38
2. 松前福山城史跡地内植生調査 にあたって	44
IV まとめ	49
写真図版	51
資料図版	77
報告書抄録	88

挿 図 目 次

第1図 史跡位置図	vi
第2図 調査区位置図	2
第3図 遺構配置図	4
第4図 番所平面図	6
第5図 番所セクション図	7
第6図 番所横暗渠詳細図	8
第7図 追手升形全体図	10
第8図 追手升形内セクション図 ・開渠案内	12
第9図 追手升形内暗渠詳細図	14
第10図 追手二ノ門廻り詳細図	16

第11図 追手二ノ門セクション図	18
第12図 堀門・井戸詳細図	20
第13図 堀門廻りセクション図	22
第14図 井戸枠・堀門礎石 ・四半敷石	24
第15図 外堀呑口廻り平面図 ・エレベーション図	26
第16図 外堀セクション図	28
第17図 出土遺物 (1~14)	35
第18図 出土遺物 (15~21)	36
第19図 出土遺物 (22~29)	37

図 版 目 次

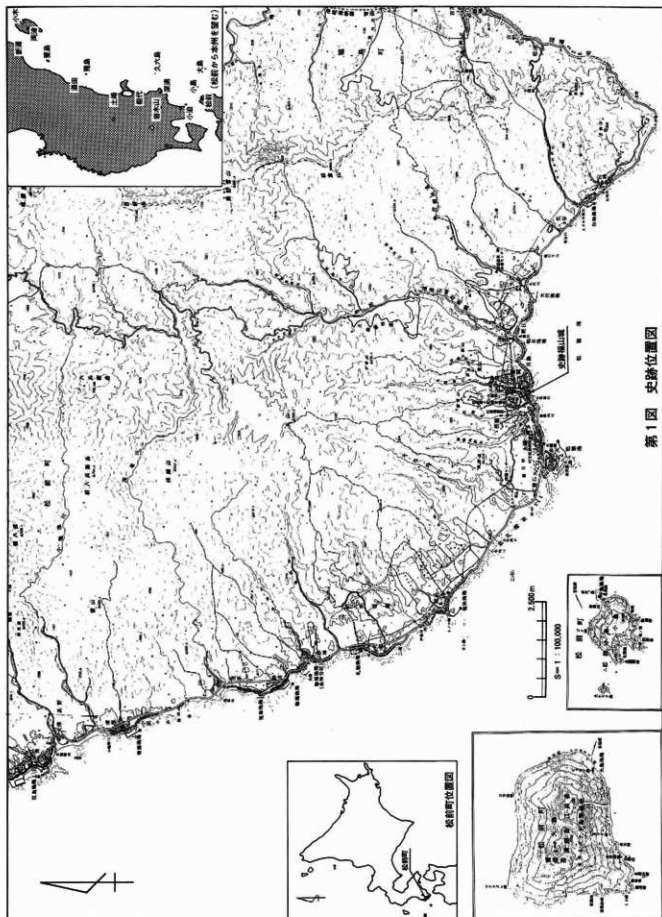
図版1	番所廻り	53	図版13	追手升形(埋門・井戸)	65
図版2	追手升形廻り	54	図版14	追手升形(埋門)	66
図版3	追手升形(平場・開渠)	55	図版15	追手升形(井戸)	67
図版4	追手升形(平場土層断面)	56	図版16	追手升形(埋門土居)	68
図版5	追手升形(開渠)	57	図版17	追手升形(井戸西側石垣)	69
図版6	追手升形(暗渠1)	58	図版18	外堀(土層堆積状況)	70
図版7	追手升形(暗渠2)	59	図版19	外堀(出隅石垣)	71
図版8	追手升形(暗渠3)	60	図版20	外堀(呑口)	72
図版9	追手升形(二ノ門1)	61	図版21	外堀(呑口土層堆積状況)	73
図版10	追手升形(二ノ門2)	62	図版22	外堀(呑口「廻廻」石垣)	74
図版11	追手升形(二ノ門3)	63	図版23	出土遺物(1~18)	75
図版12	追手升形(二ノ門4)	64	図版24	出土遺物(19~29)	76

資 料 目 次

資料1	福山城古写真	79	資料4	福山城植生調査2	85
資料2	福山城絵図	81	資料5	福山城植生調査3	87
資料3	福山城植生調査1	83			

表 目 次

第1表	出土遺物集計表	3		再調査部材リスト(3)	40
第2表	出土遺物観察表	34	第6表	旧松城小学校解体古材 再調査部材リスト(4)	41
第3表	旧松城小学校解体古材 再調査部材リスト(1)	38	第7表	旧松城小学校解体古材 再調査部材リスト(5)	42
第4表	旧松城小学校解体古材 再調査部材リスト(2)	39	第8表	旧松城小学校解体古材 再調査部材リスト(6)	43
第5表	旧松城小学校解体古材		第9表	植生調査表	45



I はじめに

1. 調査の経緯

史跡福山城の遺構確認調査は、昭和55年度から開始し今回で15回目を数える。これまでの調査により種々の遺構の位置・構造が以下のように明らかになってきた。

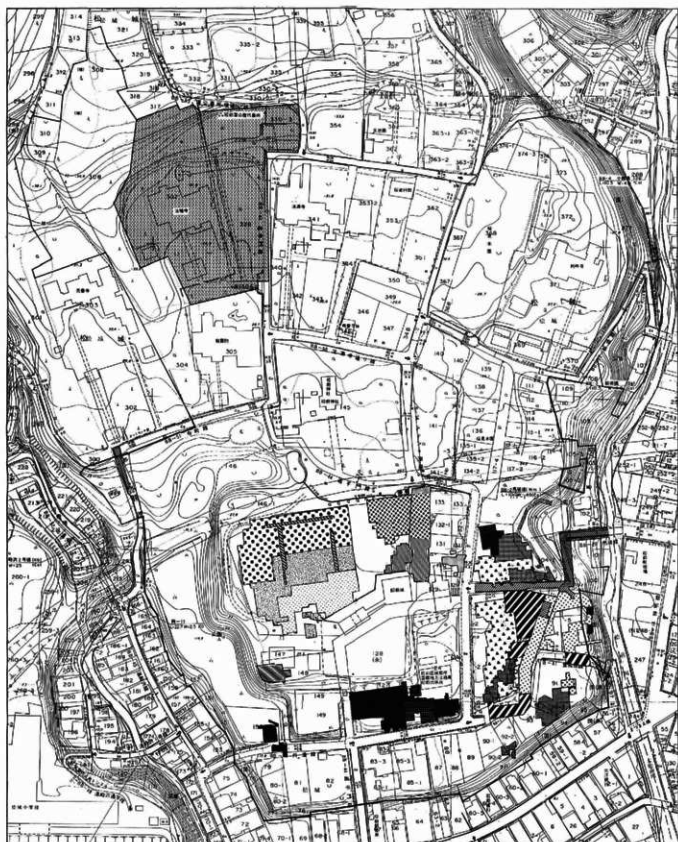
年度	調査地点	確認遺構	調査面積
昭和55年度	試掘12箇所	内堀・外堀	146㎡
昭和58年度	本丸	内堀・空壕	270㎡
昭和59年度	本丸	内堀・空壕	850㎡
昭和60年度	本丸	本丸表御殿	188㎡
昭和61年度	本丸	搦手門・御多門	170㎡
昭和62年度	本丸	本丸表御殿・排水溝	880㎡
昭和63年度	本丸	本丸表御殿・西堀石垣・排水溝	1,500㎡
平成元年度	本丸	本丸表御殿・西堀石垣・西土手・西門跡 御導場跡・地下蔵様遺構・空壕跡・外堀	1,800㎡
平成2年度	本丸	南西隅櫓・杭列・井戸・外堀	300㎡
平成3年度	三ノ丸東部	石垣・外堀・馬板側石垣	200㎡
平成4年度	三ノ丸東部	外堀・馬板門・橋・御鉄砲置所・御番所・ 七番御台場・土居・東部石垣・杭列・側溝・水路跡	1,980㎡
平成5年度	三ノ丸東部	外堀・三本松土居・天神板門	1,172㎡
平成6年度	二ノ丸東部	二重太鼓櫓・土蔵・土居・搦手門	1,600㎡
平成7年度	東郭・二ノ丸 三ノ丸東部	二重太鼓櫓・隅櫓・五番・六番台場・東郭土居、 三ノ丸土居	1,095㎡
平成8年度	東郭・二ノ丸	番所・追手門・追手升形石垣	569㎡
平成9年度	二ノ丸	二ノ丸番所・追手升形・外堀	1,161㎡

以上のように各年度の調査を終え、これまでに本丸及び本丸周辺の主要遺構を調査し、史跡福山城南東部にあたる、二ノ丸から三ノ丸にかけての遺構を集中的に調査しており、整備により次第に姿を現してきている。平成5年度の史跡整備検討委員会で、二ノ丸側の集中調査を計画し、史跡福山城の南東側全域の遺構を明らかにし、この地区の整備に資することになった。この指導をもとに平成8年度に文化庁・北海道教育委員会と協議のうえ、平成9年度の調査を実施したものである。

2. 調査の目的と成果

今年度の調査は、昨年度の史跡整備検討委員会で御指導いただいた、追手門裏の番所と、二ノ丸の追手枳形、外堀呑み口部を対象に、整備復元するための基礎的データを得るための遺構確認調査を行った。そのなかには、追手升形の二ノ門・埋門の位置と升形の確認や、昨年度に引き続き追手門周辺の遺構の確認などの目的があった。調査し確認された遺構は以下のとおりである。

- 1) 追手門裏番所 全面調査
- 2) 追手升形 全面調査
 - 升形石垣
 - 二ノ門
 - 埋門
 - 井戸



- | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|----------|-------------|
| | | | | | |
| 昭和29年度調査 | 昭和28年度調査 | 昭和27年度調査 | 昭和26年度調査 | 昭和25年度調査 | 史跡松前藩主松前家墓所 |
| | | | | | |
| 昭和23年度調査 | 平成3年度調査 | 平成2年度調査 | 平成3年度調査 | 平成4年度調査 | 平成5年度調査 |
| | | | | | |
| 平成6年度調査 | 平成6年度調査 | 平成7年度調査 | 平成8年度調査 | 平成9年度調査 | |

0 100m

第2図 調査区位置図

暗渠

- 3) 外堀呑み口 一部調査
4) 追手升形内の福山館期遺構

升形石垣

井戸

今年度の調査により、それぞれの平場のレベルが確認できた。それと共にこれら遺構のプラン・規模も明確となった。これらの遺構の位置や規模・構造が明確になったことにより、絵図との照合が昨年よりさらに広域的に可能となった。また、各標高が明らかになったことにより、慶応3年に撮影された福山城の写真を比較して、撮影された各遺構の総体のレベル関係や、遺構の立面規模までも推定が可能となったことが、今回の最大の成果である。

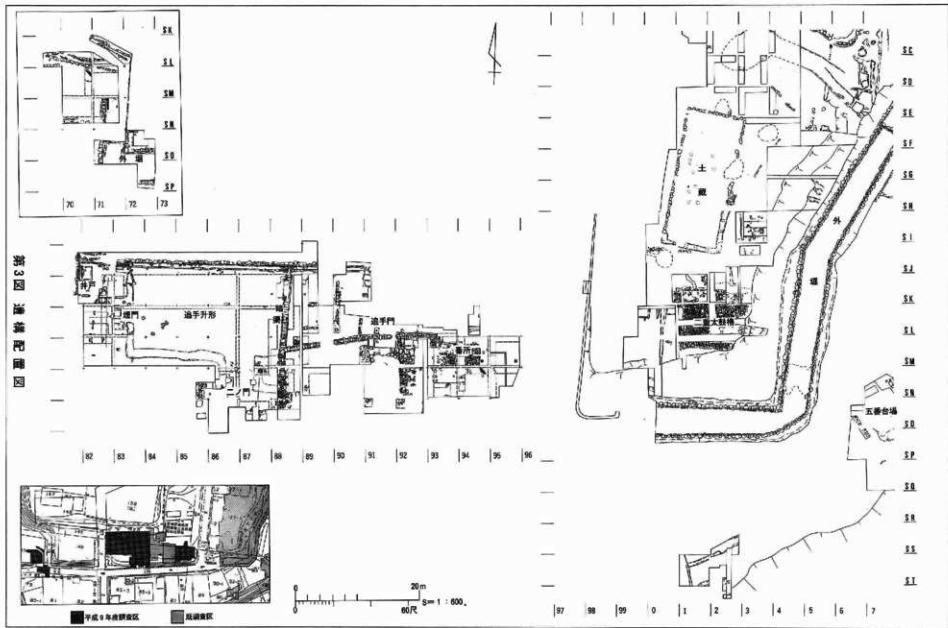
3. 調査の方法

本年度の発掘調査区は、昨年度の発掘調査区に隣接しており従前の調査区の呼称を継承して使用し、整合性を図っている。出土した遺物は、各層位ごとに取り上げ、遺構については、平面図・断面図・立面図等を必要に応じて作成した。

本年度の発掘調査は6月9日から、本格的な調査にかかった。遺構調査は、まず追手門裏の番所を調査し、次に追手升形を調査した。これらの調査は重機を使わずすべて人力で調査を行った。この調査に係わる土砂の排出には、発電機を用いてベルトコンベアー4台を使用した。多門槽下の升形石垣調査では、石垣全体が現われ、その全面を土嚢で保護した。最後に外堀呑み口の調査を行い、6月9日から開始した調査は11月10日に終了した。整理作業は3月まで行った。

陶磁器類	7,342点				
磁器 2,141点	碗類	1,258点	陶器 2,447点	碗類	312点
	皿類	567点		皿類	745点
	鉢類	39点		鉢類	101点
	徳利類	18点		徳利類	497点
	その他	259点		甕類	180点
表採および石垣裏込め砂利混入陶磁器	2,814点				
金属製品ほか	484点				
瓦	171点	木製品	6点		
銅鏡	1点	ガラス製品	2点		
鉄製品	16点	硯	7点		
銅製品	57点	櫛	1点		
古銭	17点	動物遺存体	72点		
鉛弾	1点	土器	124点		
		石器	9点		
遺構出土遺物	5,072点	その他出土遺物	2,814点	総出土点数	7,886点

第1表 出土遺物集計表



II 調査結果

1. 出土遺構

今年度の調査区から出土した遺構は、以下のとおりである。

○福山城期（安政元年完成～明治8年取り壊し）

番所	（土台石）
追手升形石垣・開渠	（石垣根掘り）
追手二ノ門	（礎盤）
埋門	（礎石根掘り）
外堀呑口	（石垣）

○福山館期（慶長11年～嘉永2年）

升形石垣	（野面石垣・石垣根掘り）
暗渠	（掘り方）

以上のおもだった遺構が発見された。以下、各地区ごとに述べる。

1) 番所廻り（第4～6図）

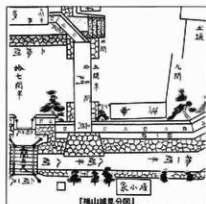
K.W.：土台布石、暗渠、石橋

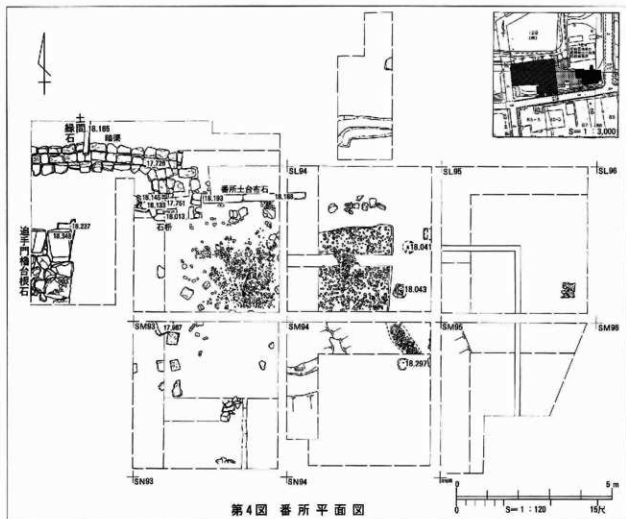
○抄録

追手門裏に番所が存在することは、松前神社所蔵縮図と幕府に提出した「福山城見分図」から判明している。今回の調査でその番所土台布石の一部を発見した。わずか2本の布石であるが、渡槽と番所の位置関係が縮図と一致している。また、番所長手方向に沿って開渠の存在することが縮図から判明するが、今回の調査では明確な痕跡を発見することができなかった。さらに、番所横に石橋と追手にぬける暗渠を発見した。

・番所

この番所は、追手門の裏手東側に位置し、追手門守備のための詰所である。追手門土間の緑石の外側と、布石の隅との距離は12.5尺程であり、約2間離れていることが判る。布石の天端は標高18.19mで、ほぼ水平に据えられている。布石の大きさは幅0.8尺高さ1.15尺程で、長さは4.3尺のものと6.7尺のものがある。布石下の地業は布基礎として第6図(EPH-h')に示すように割石を敷いている。また、第6図平面図に示すように、布石の地業が梁方向に延びていることから、この方向にも布石が敷かれていたものと思われる。布石で囲まれた土台の内側は、第6図平面図に示すように、砂利が敷かれており、第5図の土層断面b-b')の土層3)がこの砂利層である。なお、第4図平面図のSL94Gridに見られる柱部の地業は、布石と若干向きが異なっているので同時期かは不明である。





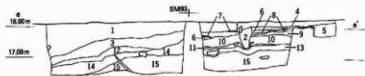
第4図 番所平面図

・暗渠関係

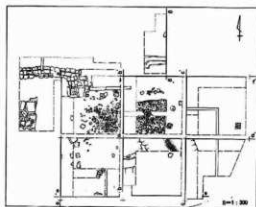
昨年度調査した追手門土間内を通る暗渠の延長を発見した。土間緑石から7尺で南に曲がり石橋となる。また、第6図EPc-c')に示すように石橋の西面に小孔を穿っており、石板で閉まれた暗渠が埋設されていた。この延長は土層観察用畔をはさんだ西側には発見されず、また、使用する石材が他の暗渠と異なることと、EPc-c')で判るように砕石を設置してから小孔を穿った状況から、この暗渠は町部分ぐらいまでの延長で、応急的に構築されたものと思われる。この暗渠の蓋石の天端は標高18.14mである。

石橋は、外々間がほぼ3尺四方で、橋の内法は1.5尺である。橋の緑石は底に敷いた2枚の平板石の上に乗り、緑石の天端から底までは1.2~1.3尺である。天端の標高は18.13mである。

暗渠の溝の内法は1尺幅で、深さは0.6~0.8尺であり、これに石蓋がかぶせてあったものと思われる。追手門の土間緑石を、暗渠の側石に直接乗せている状況が、第6図EPa-a')で判る。この追手門の土間緑石の天端の標高は18.16mである。なお、この部分の暗渠底の勾配は10尺に対し0.1尺程下がる、1/100程度の勾配であることが実測の結果判明した。また、絵図によればこの暗渠の東側の延長に開渠が存在すると予想されるが、近代の擾乱によって遺構は消滅していた。



- a-a'
- 1 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6暗褐色土・砂利・円礫多量を含む
 - 2 10YR5/6暗褐色土
 - 3 10YR5/6暗褐色土に砂利・礫
 - 4 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土
 - 5 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6オリーブ褐色土
 - 6 10YR5/6黄褐色土
 - 7 10YR5/6黄褐色土
 - 8 10YR5/6黄褐色土
 - 9 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6オリーブ褐色土
 - 10 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・10YR5/6黄褐色土
 - 11 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・礫
 - 12 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・骨石砕け・礫
 - 13 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・S YZに灰褐色土
 - 14 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・S YZに灰褐色土
 - 15 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6灰褐色土・S YZに灰褐色土



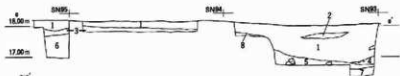
- b-b'
- 1 10YR5/6黄褐色土に骨石砕け・礫
 - 2 10YR5/6黄褐色土
 - 3 10YR5/6黄褐色土に砂・礫
 - 4 10YR5/6黄褐色土
 - 5 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 6 10YR5/6黄褐色土に礫・骨石砕け



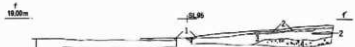
- c-c'
- 1 10YR5/6暗褐色土
 - 2 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 3 砂・小礫
 - 4 カーボン泥
 - 5 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥・骨石砕け
 - 6 10YR5/6暗褐色土にS YZに灰褐色土・10YR5/6黄褐色土・礫
 - 7 10YR5/6暗褐色土
 - 8 10YR5/6暗褐色土
 - 9 10YR5/6暗褐色土に骨石砕け・礫
 - 10 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土
 - 11 空欄の骨石
 - 12 10YR5/6暗褐色土
 - 13 10YR5/6暗褐色土に骨石砕け・カーボン泥
 - 14 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 15 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥・骨石砕け



- d-d'
- 1 10YR5/6暗褐色土
 - 2 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 3 砂利・円礫
 - 4 10YR5/6暗褐色土に砂・礫
 - 5 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土
 - 6 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・S YZに灰褐色土
 - 7 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 8 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 9 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・10 YZに灰褐色土・カーボン泥
 - 10 10YR5/6暗褐色土にカーボン泥
 - 11 10YR5/6暗褐色土にカーボン泥
 - 12 10YR5/6暗褐色土にカーボン泥
 - 13 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土
 - 14 10YR5/6暗褐色土
 - 15 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・礫
 - 16 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 17 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥



- e-e'
- 1 10YR5/6暗褐色土に砂利・円礫多量を含む
 - 2 10YR5/6暗褐色土にカーボン泥
 - 3 砂・小礫
 - 4 10YR5/6暗褐色土に砂利・礫
 - 5 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・骨石砕け・礫
 - 6 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥・骨石砕け
 - 7 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土
 - 8 10YR5/6暗褐色土に10YR5/6黄褐色土・骨石砕け



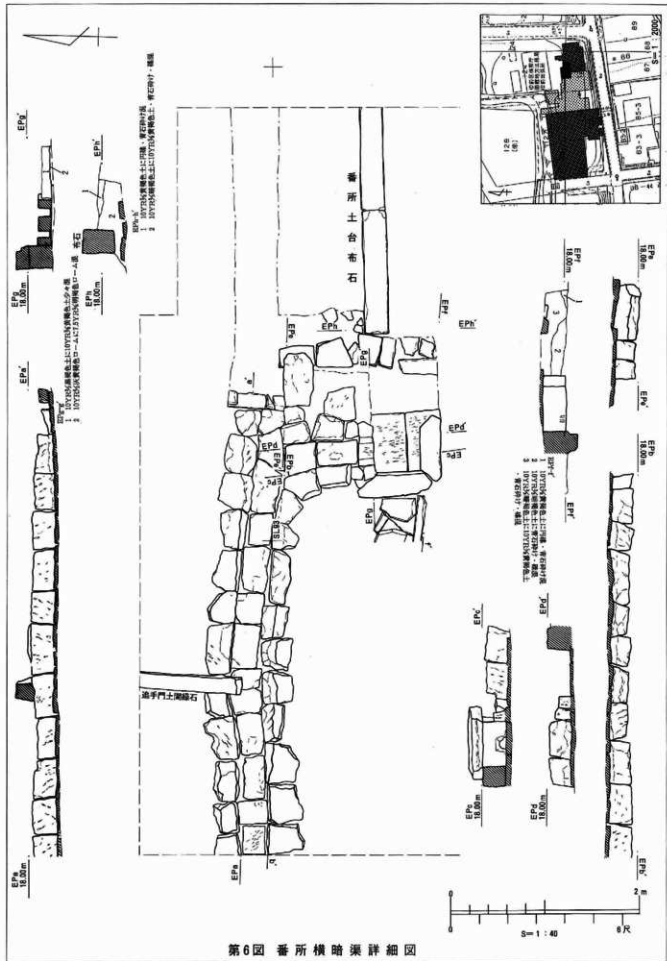
- f-f'
- 1 10YR5/6黄褐色土
 - 2 灰ゴテ（10YR5/6に灰褐色土にカーボン泥）
 - 3 10YR5/6黄褐色土にカーボン泥
 - 4 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・礫



- g-g'
- 1 10YR5/6黄褐色土に礫
 - 2 10YR5/6黄褐色土
 - 3 10YR5/6黄褐色土に灰の破片・灰・鉄屑・シイ屑
 - 4 砂利・円礫
 - 5 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・カーボン泥
 - 6 10YR5/6黄褐色土にカーボン泥・骨石砕け
 - 7 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・円礫・カーボン泥
 - 8 10YR5/6黄褐色土に10YR5/6黄褐色土・円礫・砂・礫



第5図 番所セクション図



第6圖 聖所橋橫切面詳細圖

・築城時の造成

第5図土層図(a-a')を見ると、土層3)までが明治8年以降の堆積土である。明治8年の城取り壊し時に土層6, 12, 14)の上面までを削り取り、外堀に投げ込まれたものと思われる。同じような状況は土層図(c-c')にも認められ、土層8)の上面までが削り取られた。さて、築城時の造成であるが、この辺りは築城時に盛り土した痕跡は残っておらず、唯一の盛り土である土層は外堀の埋立に使われた。また、昨年度の調査で追手門前にあった福山館期の遺構は、追手門の造成の際上面が削平されていたので、この番所付近も福山館期の地表面が削平されたものと考えられる。福山館期には、何度か城地を修造したことが文献資料から知ることができ、そうした城地の修造工事の痕跡を土層(a-a')、土層(c-c')に見ることができる。特に土層図(c-c')の土層13~15)は炭化物が混入していることから、火災の後に修造したことが想定できる。

2) 追手升形廻り

K.W.: 追手升形、開渠、暗渠、追手二ノ門、埋門、井戸

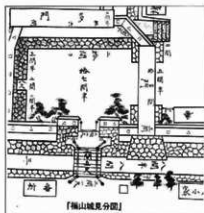
○抄録

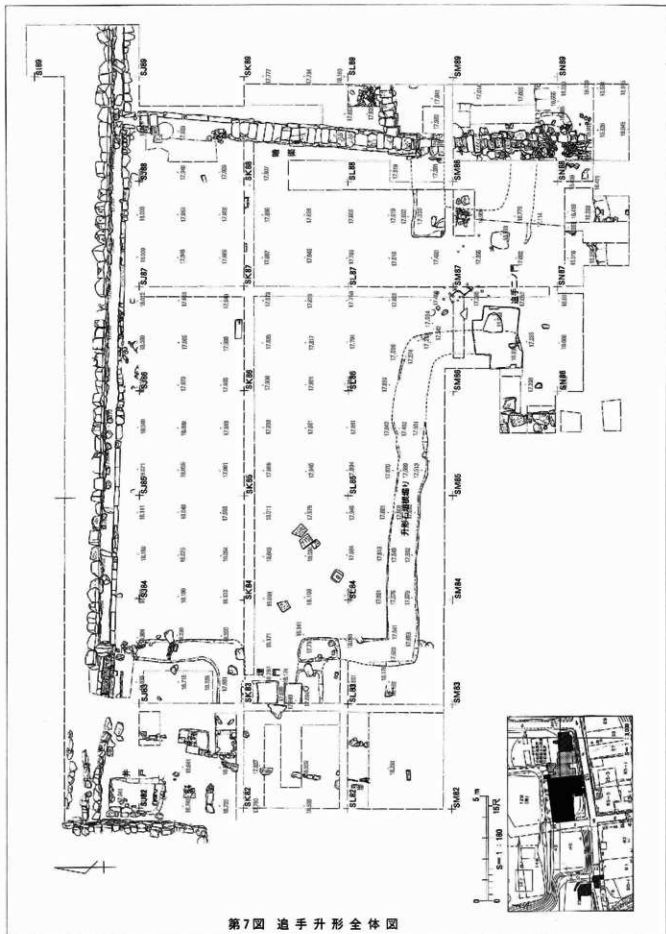
追手升形の全容が明かとなった。升形の規模は東西123尺、南北47.6尺であることが判明し、嘉永7年10月に幕府に提出した「福山城見分図」に書かれている規模の東西「二拾間〇」(120尺余り)、南北「八間」(48尺)とは、東西方向が3尺異なっていた。追手二ノ門は、門柱礎石の礎盤が出土し、その規模は柱の中心間で13尺あることが判明した。埋門は門柱礎石の根掘りが発見され、柱の中心間が7尺であろうと推定される。井戸桁は升形土層の外側に発見され、長さ6尺で幅3.5尺、高さが現存部で3尺あり、比較的粒の大きい砂岩の一石をくり抜き作られていた。

・追手升形(第7.8図)

昨年度の追手門の調査と、今年度の升形部の調査によって、升形全体の規模構造が判明した。

升形石垣: 升形内は、多門槽下の石垣と埋門を通る石垣の高さは8尺であることが土層断面などから判明している。しかし、外堀側については、根掘りの規模が埋門を通る石垣の根掘りの規模と同じであるため、積み上げ高8尺規模の石垣と思われるが、明治8年までの城取り壊しにより、土層断面等明らかな痕跡が、存在しないので判然としない。升形の規模は、石垣下場の内側間で、東西方向についてはSI-83Gridに残っていた埋門を通る石垣の、開渠を塞ぐ石垣根石の路盤面から追手門正面左側の槽台石垣根石の、石垣立ち上がり部のハツリ面までの距離が37.26mで122.97尺ある。また、南北方向については、第8図土層図(c-c')の土層17)が石垣根石抜き取り跡であり、その内側から開渠の石垣立ち上がり部のハツリ面までの距離が14.42mで47.59尺あり、石垣抜き取り時に壁面が崩れることを考えると、





第7图 升手台形全体图

ほぼ完成時の規模である、48尺に近いことが判る。

平場土層断面：第8図土層図d-d'で説明する。土層17)の小砂利層は、福山城期の表土層で、ほぼ升形全面に敷き詰められていた。土層16)は土層17)を掘り込み堆積しているので時間差がある。この土層16)の窪みは礎盤を伴う地業と考えられるが、対になる遺構が発見されていない。また、土層16)は門柱礎石抜き取り後の堆積土である土層19)の上面を覆っていることから、城取り壊し工事に係わる遺構の可能性が考えられる。土層14)は石垣表込め砂利が石垣抜き取りによって崩れて堆積したものである。福山館期の表土は土層42~45)である。土層41)は瓦を多量に混入していることから築城時に堆積したものと考えられる。なお、築城までの盛り土は土層17~41)までで、福山館期の表土である土層42~45)は、昨年度調査した遺構と絵図に描かれた遺構の対比などから、絵図の描かれた文化年間まで遡ることが可能である。福山城期の表土と福山館期の表土間の盛り土には遺物がほとんど含まれていないことと、中央部を除いては単一の土を堆積させていることから、これらはすべて嘉永年間築城時に堆積した可能性が高い。

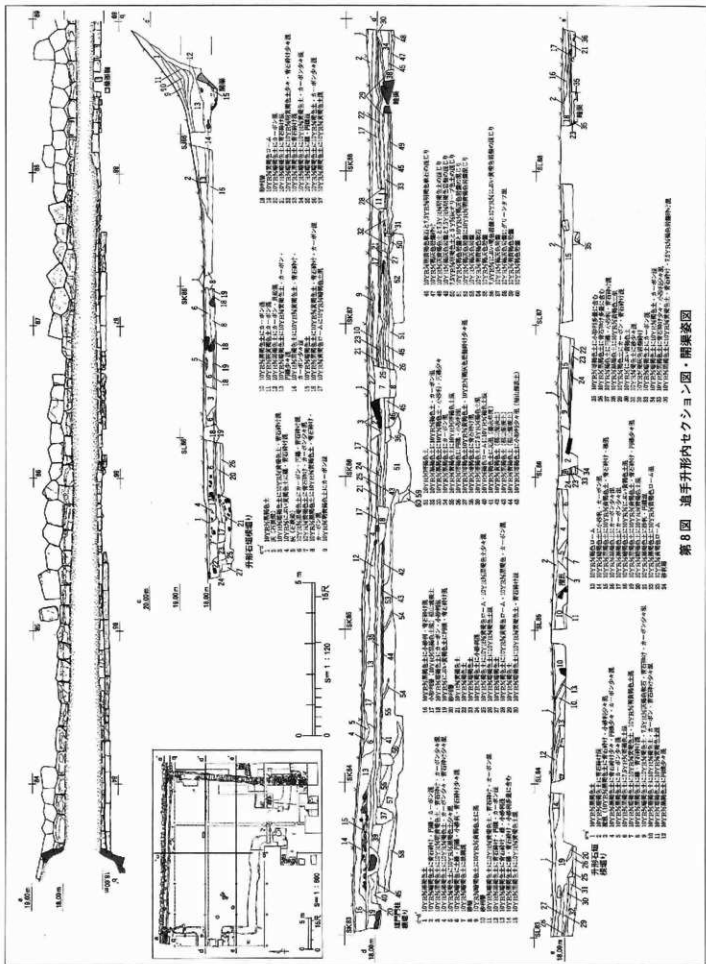


・開渠 (第7.8図)

構造：多門槽下の升形石垣は、開渠を伴っている。開渠の西端は暗渠となり升形西面の土層を穿って井戸の北側面に続いている。井戸のオーバーフローとそのさらに西側にある平場の雨水が暗渠を通じ、この開渠に流れ込む構造となっている。升形の平場と井戸のある平場との比高差は約2尺あり、井戸のある方が高い。そして、井戸のある平場よりその西側の平場の方が3尺高い。開渠構造図をみると、溝の北面を石垣根石で、南面は切り石を並べて、溝の内部には玉砂利を敷いていることが判る。石垣根石は、溝底から1尺程の高さまでは面をそろえておらず切り出したままの状態、それ以上の高さから面をハツリそろえ石垣面につづいている。このハツリ面の高さは切り石天端高よりやや低く、そのハツリ部から切り石までの内法幅は2尺ある。石垣根石は、第10図(SPa-a')に示す土層23)の地山岩盤を溝底とし、更に0.5尺程掘り込み、地山岩盤面に直に置かれる。切り石は二段に重ねるが、下段の石は場所によって石垣石と同様のグリーンタフを使用し、面だけを切り石風にしていくところもある。切り石の大きさは上面で幅0.7~0.8尺、場所によっては0.6尺幅のものを連続して使用しているところもある。厚さは0.5~0.7尺で、断面形がやや長方形の切り石である。切り石の石材は、地元産のものは余り無く、ほとんどが、国内輸入の既製品と思われる。長さは様々で、最大で3.5尺のものもあるが、3尺程度のものが多い。

勾配：第8図の開渠姿図a-a')とb-b')をみると、暗渠呑口に向かっての下り勾配であることが判る。84ラインでの切り石の天端高が標高18.23mであるのに対し、87ラインでの切り石の天端高は標高18.04mであるので、この区間では15mで0.19m下る、1.26/100程度の勾配である。

・暗渠 (第9図)



第8図 道手升形内セクション図・開濠図

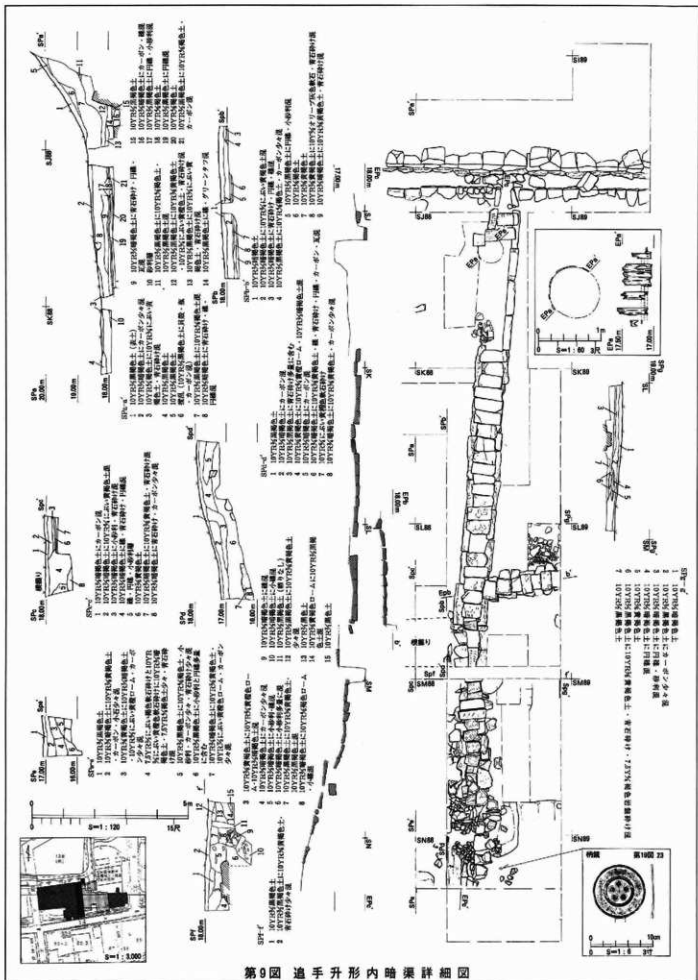
構造：SI-88Gridの開渠を調査中に、この暗渠の呑口を発見した。この暗渠は多門槽下の石垣に伴う開渠の廃水を呑口からすべて取り込み、外堀石垣裏込めに排出させる機能を持っている。暗渠の途中で、番所横から追手門土間を通る暗渠と連絡し、これらの廃水も併せて排出する。この石組暗渠の構造は追手門土間を通る暗渠と異なり、側石に開渠に使用されていたものと同様の切り石を用いている。しかし切り石を用いているのも土居石垣根掘り部分までで、そこから裏込めまでの土層の下に潜る部分は、追手門土間を通る暗渠と同様、側石に割石を使用している。石組の規模は、呑口部で側石間の内法が1.5尺である。なお、図上では1尺であるが、これは取り壊しの際に側石が動かされたものである。SKライン付近での内法は1.8尺あり、SLライン付近では1.7尺である。いずれも側石に切り石を使用した部位は内法幅が広い。切り石を使用しないSM-88Gridの暗渠では内法幅が1.1尺である。1.1尺幅は、追手門土間を通る暗渠と同じ規模であり、同じ工法でもある。

福山館期開渠：SN-88Grid付近は城取り壊しの際、土居を崩し外堀の埋立を行った際に、暗渠の上面が覆乱を受けたと思われる。また、この地区の暗渠部に木製の底板が発見された。これが石組暗渠に伴うものかは判然としない。あるいはもう一時期前の福山館期の土塁の下を通る暗渠の底板である可能性もある。SPf-1'に認められる土層5～10)までの覆土は、福山城期の石組暗渠を構築する際、福山館期の開渠遺構の底にこれを構築し、これらの土で埋め戻した可能性が高く、埋め戻し終わってから最後に杭を抜き取り、その抜き取り穴が土層11)であると思われる。さらに、文化文政期に描かれたと考えられている『松前自沖口至奉行所図』（『史跡福山城保存管理計画書』1997.3 PP.63）の「番所」と「武器蔵」の図に、この開渠が描かれており、位置関係が一致している。なお、土塁が築かれていたのは、このセクション面より南側であったと思われる。

柄鏡出土：第19図23に図示した柄鏡が第9図SJ-88Gridから出土した。出土した層位は福山館期の土塁盛り土下の自然堆積層の法面に乗った状態で出土した。このあたりは発掘調査結果と文化年間と思われる『松前奉行所経営地割図』（『史跡福山城保存管理計画書』1997.3 PP.62）との対比から同時期の『松前自沖口至奉行所図』（前掲書PP.62～64）のなかの「赤門」に描かれている門の右側の土塁の盛り土内であることが判明している。

福山館のおおまかな規模・構造を知り得る資料は、寛文9（1669）年の『津軽一統志』、寛文10（1670）年の『狄蜂起集書』、享保2（1712）年の『松前蝦夷記』などがあるが、具体的な館全体の規模を間尺で知り得る資料としては『松前蝦夷記』がある。これによれば「居所東西九十三間南北百貳十六間四尺」とあり、東西558尺で南北が760尺であったことが判る。東西は出土遺構の対比によって文化年間に描かれた『松前奉行所経営地割図』の本丸西側塀から「裏門」の升形ぐらゐまでの規模であるが、南北については地割図の北端から計ると同図の「裏門」までで今回出土した赤門脇までは届かない。したがって、ここに記されている「居所」は本丸を指しているであろうことが窺える。

また、『松前蝦夷記』に「塀 南外通欄内板塀」とあり、「南外通」は新城福山城



の外堀にあたることが諸図から判明している。そして門については「門 三カ所 内南ノ方東ノ方北西ノ方」とあり、文化年間の「松前自沖口至奉行所図」のなかの「赤門」がこの「南ノ方」の門であることが判る。柄鏡の出土した場所を描いている「赤門」の図をみると、土居上に構を巡らせているのが判る。このように、「南外通構」は「赤門」の図に見られるように享保年間には構を巡らせていたことが想像できる。しかし、土居についてはこの文献からは判明しない。

そこで、福山館期における「赤門」通の土塁・土居の構築年代を知るにはこの柄鏡の鋳造年代が重要であることが判る。この柄鏡は「梅鉢」の家紋が入った柄鏡で「人見和泉守重次」の銘がある。「天下一」の詩称が入らないことから「天下一」の使用禁止令のなされた天和2（1682）年以降の作であることが判る。そして、江戸時代後期には、詩称・姓・守名・名乗を含めた長い銘が好んで使われたようであるので、この柄鏡の製作年代は、天和2年以降、江戸後期以前、の可能性が高いといえる。

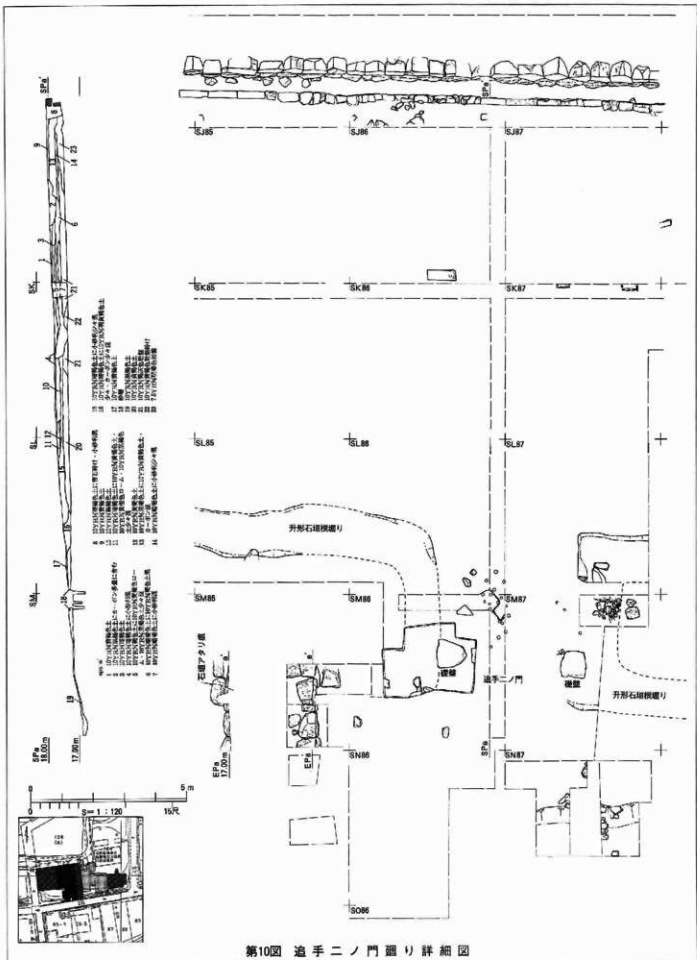
さて、この土塁の構築年代は判らないが、修造記録をみると元禄7（1694）年5月「福山南門及門外石垣修造」（『福山秘府』）とあり、これ以外にこの地域の修造は見当たらない。また、「南門」は、先の「赤門」と考えられることから、この時柄鏡の出土した周辺を修造していたことが判る。また、門の外の石垣を「修造」したということは、「赤門」の絵図に見られるような門と若干の石垣を積んだ土塁の形状がそれ以前にもあったことも想像される。

以上を整理すると、「赤門」の絵図に見られる遺構は、享保2年にはほぼ確実にあったと言え、元禄7年の「修造」という記録からすればそれ以前にもあった可能性もある。そして、柄鏡の製作年代が天和2年以降、江戸後期以前であり、土塁の堆積土の最下層から出土したことから「修造」記録から、元禄7年にこれが堆積した可能性が高いと考えられる。

・追手二ノ門（第10.11図）

この、追手二ノ門が発見された辺りは、非常に近代の擾乱が著しい地区であった。

升形石垣の根掘り遺構を追っているうちにSL-86Gridで根掘りの曲がることが判明し、さらにSL-87Gridでも根掘り遺構の曲がることが判明したため、この一帯を調査することにした。調査区はコンクリート塊や、トタン板がまもって埋没していたため遺構面より上位の土層図は作成することが出来なかった。また、遺構面は比較的擾乱を受けていなかったものの、明治8年城取り壊しの際の土居の崩れ土の堆積状況と平場の地表との関係を、擾乱のため明確にできなかった。礎盤より南側の平場のレベルについては、これ以上下がることはなく、城取り壊しの際に若干削られていることは確実と思われる。また、唯一二ノ門土間の四半敷の敷石が門下に敷かれる下地の砂層上に残っていた。この敷石の上面のレベルは17.41mであり、これによって当時の敷石面のレベルを特定することが可能となった。また、礎盤のレベルは16.96mであるので、土間が水平に構築されていたとすれば、この上に乗る礎石の厚さが0.51m以上であることが考えられる。さらに、礎盤のレベルは西側で16.96m、東側で16.89mあり、東側の方が7cm低い。そして、東側の礎盤には、礎石のアタリの幅が1.5尺までは、はっきりと認められた。



第10図 造手ニノ門廻り詳細図

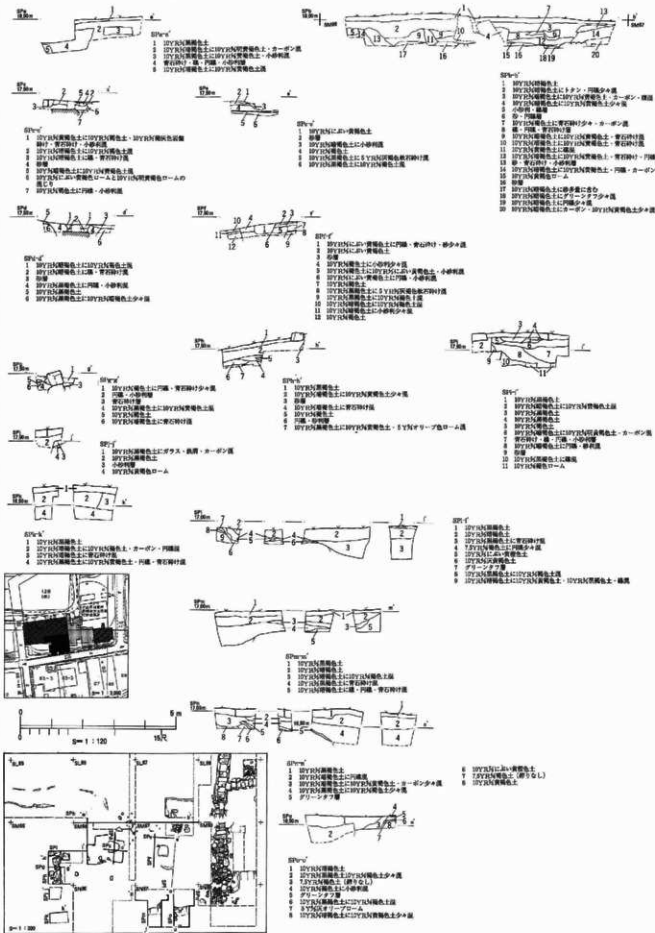
平面図：追手二ノ門廻りは二ノ門礎盤と両側の石垣根掘り、そして門外SM-85Grdに石垣根石が発見された。二ノ門の柱間は、西側の礎盤の幅 $0.96\text{m}/2$ と、東側の礎盤の幅 $0.83\text{m}/2$ と、両礎盤の内々間の 3.04m を合計すると、中心間は 3.935m で、尺に換算すると 12.98 尺となる。また、門脇の石垣間については、幕府に提出した『福山城見分図』に「二間四尺」(16尺)と記されているので、両礎盤の外々間 4.81m (15.87 尺)が、門脇の両石垣内に収まることが判る。

二ノ門西側の外堀面の石垣の長さが『福山城見分図』に「二間二尺」(14尺)とあり、旧地表面での石垣面から礎盤西面までの距離が 3.94m (13.00 尺)であるので、一尺異なることが判る。これに対し東側の外堀面の石垣の長さは同図に「二間」とある。第9図SPd-d'の上層3)にこの石垣の根掘りに堆積する裏込め砂利が見えており、礎盤の東端からこのセクション面までの距離が 3.40m (11.2 尺)あるので、ほぼ絵図と同規模の石垣が続いていたことは確実と思われる。また、門脇の土居幅は、西側では第8図土層図c-c'の土層17)の石垣抜き取り穴北壁と第10図EPa-a'の旧地表面での石垣アタリ痕までの距離が 5.11m (16.86 尺)であるので、石垣抜き取り時に壁が崩れることを考慮すると、石垣下場の外々間で約16尺程と考えられる。東側では第9図SPc-c'の土層4)の堆積する根掘り穴南壁と第9図SPd-d'の土層2)の堆積する石垣抜き取り穴北壁との距離は根掘りの溝の内々で 3.48m (11.48 尺)ある。これに石垣幅2尺づつを加えると約 15.5 尺程になり、同じく石垣抜き取り時の壁が崩れる分を考慮すると、西側と同様、石垣下場の外々間で約16尺程と考えられる。

土層図：第10図SPa-a'の土層図の上面が福山城期の地表面であるが、SMラインより南側は上面が削られ敷石の下地の砂層である土層18)が露出している。また、福山館期の地表面は土層14.15)の上面である。SMラインの直下にある枕孔には、内部に敷石の下地の砂が堆積していたことから、二ノ門工事の際の枕孔と思われる。さらに、調査した範囲からは、これ以前の遺構の痕跡が認められなかったことから、文化年間に描かれた『松前奉行所経営地割図』の位置関係からして、同時期に絵図に描かれた「赤門」の遺構をそのまま新城に用いた可能性も考えられようが、第10図SPa-a'の土層図が示すように、「赤門」の地下遺構をすべて削り取り、基礎レベルを上げて作り直した可能性の方が高いのかも知れない。

礎盤周辺の土層図をSPc-c'からSPf-f'に示した。このうち、SPd-d'の土層1.2)の堆積する礎石抜き取り穴が認められる。穴の幅は下場で 0.66m (2.17 尺)である。SPf-f'の土層1)の堆積する凹みは、両礎石を渡す切り石を据えるための地業と思われる。

二ノ門外側の外堀検閲にある平場の検出には、SPg-g'の土層3)のグリーンタフの砕片層がKey層となる。この土層は築城時の石垣工事の際に、その周辺に排出し堆積するもので、搦手門跡や追手門跡などでも認められた。一般的にはこの上位に粘性の高いロームや褐色度を叩き締め整地し小砂利を敷いている。最も良好に残っているSPg-g'の旧地表面は土層1)の上面ぐらいで、その標高は 17.38m である。二ノ門西側の他の土層断面は土居内部の堆積状態で、SNラインより南側はSPj-j')



第11図 追手ニノ門セクション図

に示すように、土層3、4)が築城時盛り土で、それより上が城取り壊しの際に、外堀埋立のため削られ、明治以降土層1、2)が堆積している。また、SPk-k')の土層3、4)に含まれるグリーントフ碎片は明治以降の石垣積みの際に堆積したものである。橋の東側にある平場は、SPn-n')の土層5)にグリーントフの碎片が堆積しているが、これは明治以降の石積み時のものである可能性が高い。SPo-o')の土層5)のグリーントフ碎片層は築城時の石垣工事面であり、土層4)が旧表土であったと考えられる。土層4)の上面の標高は16.82mで上面が若干削られている可能性がある。次にSP1-1')土層7)が碎片層でこれより上位に旧表土があったものと思われ、碎片層の上面の標高は16.78mである。SPm-m')の土層5)にも碎片が含まれ、その上面の標高は16.96mである。以上のようにSNライン近くの旧地表の標高は17m付近にあることが考えられる。そして、二つの礎盤のレベルが示すように東側がやや低いのかも知れない。いずれにせよ二ノ門より外側の平場は、外堀に向かって低くなって行くものと思われる。

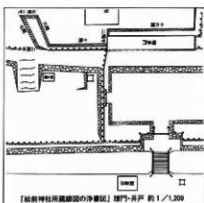
勾配：第10図SPA-a')間の、SJラインの標高が18.05mで、SKラインの標高が17.93mであるので5mの距離で0.13m下がることが判り、この区間での勾配は2.6/100である。また、SLラインの標高は17.76mあり、SKラインとの5mの距離に対する比高差は0.16mあり、3.2/100の勾配がある。さらに、SMラインの敷石の上面の標高が17.41mでSLラインと5.5mの距離に対し、比高差が0.35mあり6.36/100の勾配がある。このように、二ノ門に向かって勾配率が徐々に増加することが判る。仮に、土層図を示した第11図のSPm') Pointまで、SL~SM間と同じ6.36/100の勾配で下るとすれば、SMラインから4.8mあるので比高差は0.305mとなり、SPm') Pointでの標高は17.105mと予想され、これは土層観察の結果と矛盾しない。しかし、二ノ門土間の敷石部の勾配のとりかたによっては、これ以上高いことも十分考えられる。

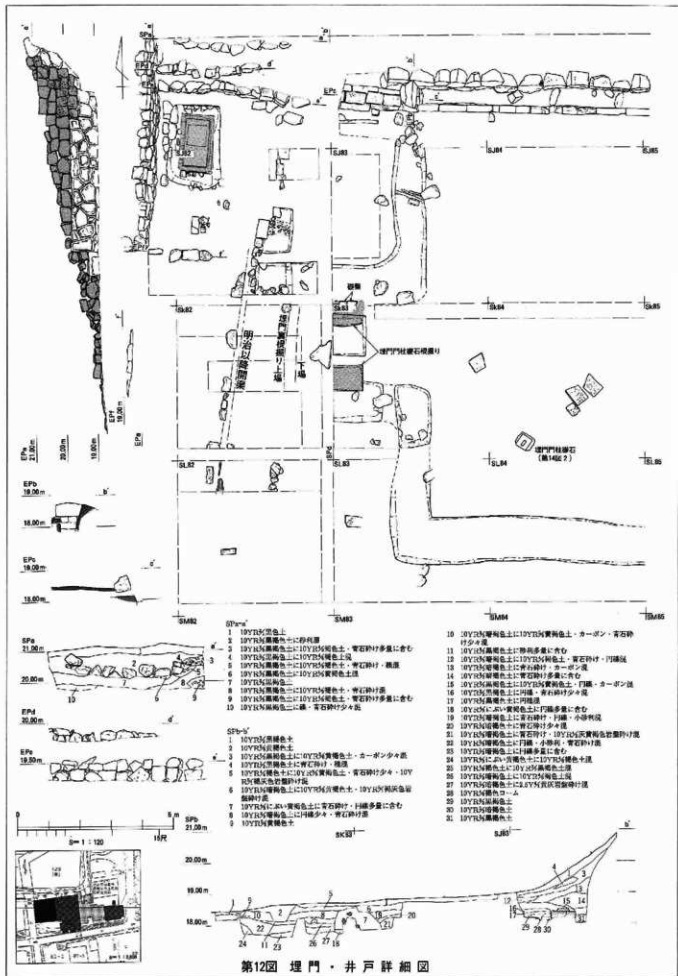


・埋門、井戸 (第12、13図)

絵図：埋門は升形西側にあり、『福山城見分図』から石垣の長さが北側から「三間半」「二間」「二間半」とあり、都合8間であり、中の「二間」は内入の石垣間の距離であることが判明する。また、内入部に「八尺」とあるのは埋門の両側の石垣間の距離であろうことが発掘調査の結果から判明した。同図から埋門上部に切り石を渡している状況が看取出来る。『松前神社所蔵絵図の浄書図』を見ると、埋門のある内入部が石垣となっているが、オリジナルの『松前神社所蔵絵図』(資料2-3、4)では『福山城見分図』と同様、埋門上部に切り石を渡している状況が描かれており、複写の誤りであることが判る。したがって、『福山城見分図』とオリジナルの『松前神社所蔵絵図』から、埋門上部は切り石を渡していたことが判明した。また、設計初期に描かれたと考えられる『松前城』図(資料2-2)では、門裏の石垣を欠いており、初期には埋門内を通過できる設計であったようであるが、『松前神社所蔵絵図』では、この門の裏側を石垣で塞いでいる。なお、『福山城見分図』には、裏側が描かれていない。

井戸は『福山城見分図』の升形の仕切の土居の裏側に、「拾七間半」と書いてあ





る上に四角く描かれている。また、「松前神社線図」(資料2-3,4)を見ると、井戸の西側に接して低い石垣が鉤の手に巡らされていることが判り、西に折れる部分の石垣のテーパーの描かれ方から、井戸のある平場より、この石垣の西側の平場の方が高くなる設計であったことが判明する。この石垣は「福山城見分図」には描かれていない。なお、「松前神社所蔵線図の浄書図」では、このテーパーが逆勾配になっており、これも複写の誤りである。

埋門：この地区の調査では、第12図に示すように、埋門の両側の石垣根掘りと、土居の内側に入る石垣根掘り、そして門の両脇の石垣根掘り、門柱礎石の根掘りが発見された。この地区は土層が非常に複雑であるし、遺構面が土居をはさんで二段に分れており、さらに福山館期の遺構面も存在しているので、まず主な遺構に関わる土層説明から行う。

土層図：第13図(SPa-a')の埋門を縦断する土層を軸に各遺構との関連を説明する。

なお、土層番号の前に、SP名が付かなければすべてSPa-a')の土層であり、SP名は、断わりがなければすべて第13図中のものである。

近代の攪乱は土層5.6.10.11)で、土層11)は一時期表土(道路)であった可能性がある。土層5)の掘り込みは、SPc-c')土層2)と同時期で明治以降開渠を掘った際の根掘り跡である。この開渠は両側を石で囲み底に木板を敷くものである。また、土層6)のロームは、SPc-c')土層3)、SPd-d')土層2)、SPe-e')土層1)などに共通して認められるもので、底面のレベルが一定していることから何らかの建物の基礎地業と考えられる。

福山城期の弁形内の表土は土層14)であり、土居をはさんで弁形の外側の表土は土層13)である。両者の標高は土層14)が18.21mであり、土層13)が18.76mで0.54m(1.78尺)比高差ある。福山館期の表土は土層20)で標高は17.93mあり、福山城期の同地点の標高は18.15mであるので比高差は0.22m(0.72尺)である。二ノ門部分を除いて概ね同程度の盛り土がなされている。また、土層23.24)の上面までが福山館期と考えられ、SPc-c')土層7~10)、SPd-d')土層5)、SPh-h')土層3)もこれとはほぼ同レベルで館期の地表面と思われる。

築城時の粗造成と思われるものとして、地山の岩盤が混入している土層15.16.22)これと同様の土はSPc-c')土層6)にある。また、土質は異なるがSPe-e')土層7)、SPf-f')土層5)とも、炭化物が混入していることから同じく粗造成の土砂と考えられる。

土居内の土砂関係としては、SPf-f')1~4)までがグリーンタフの碎片が混入していることから、石垣工事と同時に土居内に堆積した土砂であると考えられる。城取り壊しの石垣抜き取り際に土層3.4)の土居の裏込めが崩れ落ちたもので、SPb-b')土層3)も同様である。

埋門裏根掘りが埋門の扉のすぐ裏側に発見された。これは、築城時の粗造成である土層22)を掘り込み、根掘りの溝を構築し、そこに土層8)が堆積している。そして、土層8)は石垣根掘りに堆積する栗石で、抜き取り後に崩れ落ちた同質の裏

込め栗石がその上部に混ざっている。そして、土層3)あるいは門柱礎石の栗石である土層7)とは色調が異なる。この土層8)は、SPb-b')土層6)、そしてSPc-c')土層5)、SPd-d')土層9)ともまったく同じ土層で、底面の標高も18m付近で一定している。このように扉の裏側を回り込むように配置され、埋門両側の内入部の石垣根掘りに連結する。この根掘り内部に堆積する栗石は、升形を巡る土居石垣根掘りに堆積する、SPi-i')土層2.3.5)や、SPj-j')土層1.2)そして、SPk-k')土層6)とほとんど同じ土質である。また、両者の根掘り底のレベルは、扉の裏側を回り込む根掘り底が標高18m付近に対し、升形を巡る土居石垣根掘り底は83ラインで標高17.7mあり、約1尺扉の裏側を回り込む根掘り底の方が高い。以上のことからこの根掘りは升形土居石垣と同様の石垣根掘りと思われ、さらに覆土の状態から、これらは同時期に構築されたものと考えられる。

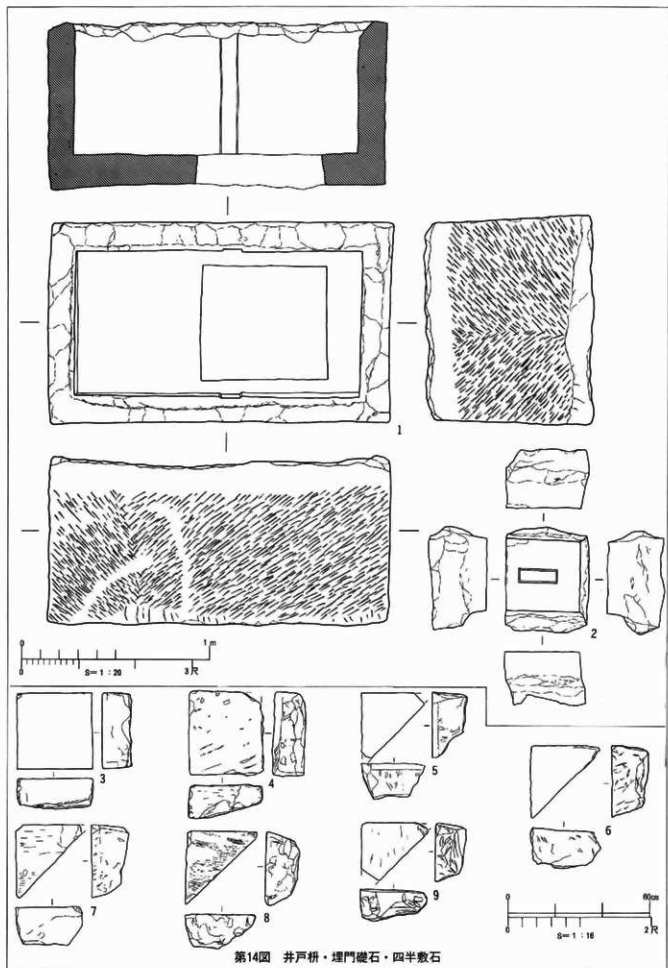
埋門礎石根掘りについては、北側の礎石根掘りには土層7)が堆積している。この状況は、第12図SPb-b')土層7)にもみられる。南側の礎石根掘りについては、第12図SPb-b')土層11,22,23)が堆積しているように描かれているが、実はこの堆積状況は礎石根掘りの掘り穴の壁の土層堆積状況で、ちょうど根掘りの壁とセクションラインが一致した結果、この様な図になってしまった。北側の礎石根掘りについては、根掘りの壁にわずかに張り付いて残った覆土(栗石)が、第12図SPb-b')土層7)として描かれている。南側の根石根掘りにも、北側と同様の覆土(栗石)が堆積していたが、根掘りの範囲内を掘りきってしまった。南側の根掘り底は標高17.61mで、北側の根掘り底は標高17.70mで、0.09m北側の方が高い。また、北側に礎盤が残っており、この標高は17.97mである。この付近の地表面の標高は18.20~18.25mの間ぐらいである。南側の根掘りの北西に接して平坦な川原石が敷かれており、この天端の標高が18.25mであった。

西側の土居石垣については、第12図SPa-a')土層4)の右側にあるグリーンタフの切り石があり、これが土居天端石と思われる。この石の天端標高は20.64mあり、埋門の土居を挟んだ西側の平場の地表面が標高18.21mあるので、天端との比高差は1.88m(6.20尺)あり、約6尺の石垣高であったことが判明する。また、埋門前の升形内の平場の地表面の標高が18.21mであるので先の天端との比高差は2.43mであり、尺に換算すると8.01尺であることが判る。升形の北面(多門下)の石垣の石積み高が前年度の調査で8尺であることが判っているため、この結果とも一致する。これらのことから埋門をまたぐこの升形土居石垣は、東西面とも天端高が同じで平場の高さの違いによって、東面では8尺積み、西面では6尺積み上げていたであろうことが判明する。

つぎに、この土居石垣の根掘りについては、第13図の土層図からは認められない。第13図SPa-a')土層11)より上位は近代の攪乱によって削られるが、唯一その下位の、土層12)の堆積する凹み辺りがそれぞれに該当するのかもしれない。

平面図：それぞれの遺構の平面規模について説明する。

埋門廻りの石垣根掘りの規模は4~5尺幅で、深さは旧地表面から1.3~1.5尺である。埋門両脇の内入部の根掘りは幅4尺で、門柱礎石の根掘りに添う。南側の門柱礎石の根掘りの規模は、上場で南北0.83m(2.73尺)、東西0.95m(3.13尺)で、



北側もほぼ同規模である。根掘りの内々間は、上場で1.26m (4.15尺) である。2.73尺と4.15尺を合計すると、門柱礎石の根掘りの芯々間は6.88尺程となり、埋門の柱間は芯々で7尺であろうと考えられる。埋門裏の石垣根掘りの規模は平面形が不明であるが、門柱礎石根掘りの端から、この根掘り下場までの距離は4尺である。

埋門をまたぐ土居の西面の石垣根掘りは、近代の擾乱により土層観察では確認できなかった。しかし、この石垣の天端の石積み高と、平面位置が判っているので、石積み勾配から土居幅を推定することが可能である。現存する福山城本丸石垣の調査で、高さ8尺の石垣の石積み勾配は、引渡しで3.5尺上がって1尺後ろに下がる勾配であることが判明している。これを6尺高で換算すれば、石垣下場は1.71尺天端位置から西側に寄ることが考えられるが、石垣の積み始めから4尺（反り弛みの中央）ぐらいまでは3尺上がって1尺後ろに下がる勾配であるので、これを勘案すると、石垣下場は1.7～2尺ぐらい天端位置から西側に寄ることが予想される。この予想される位置と、第12図EPc-c'の石垣下場までを、水平距離で計ると16.5～17尺程となることが判る。また、第12図EPc-c'の石垣下場から井戸西側の石垣下場までの水平距離は8.34m (27.52尺) である。

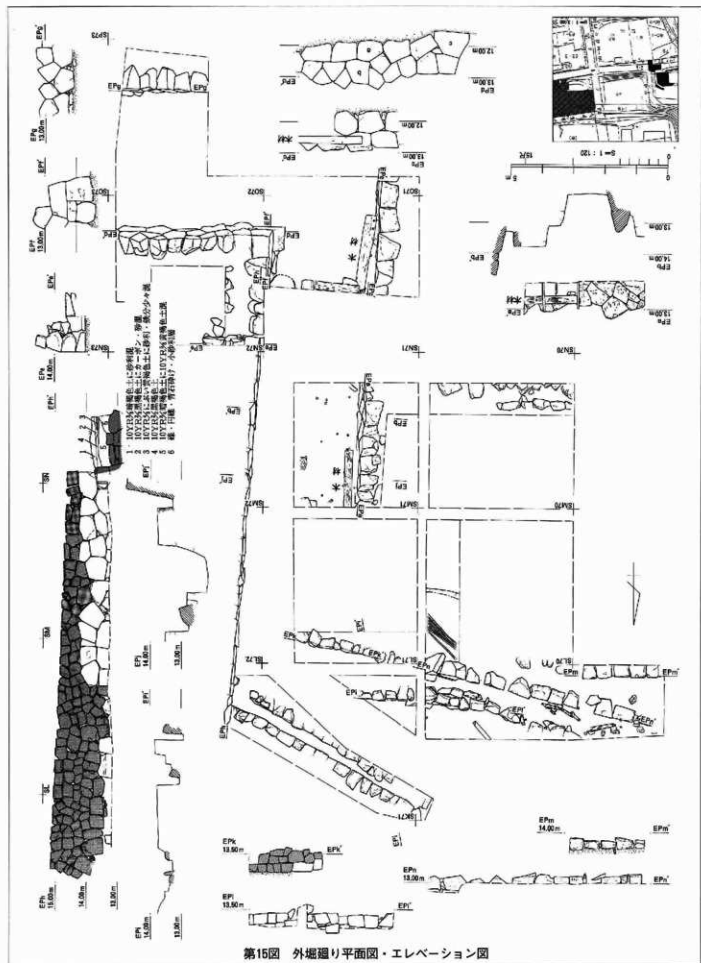
野面石垣（第12図EPa-a'、b-b'）が井戸の北面に部分的に残っていた。これは、「松前自沖口至奉行所図」（前掲書）の「番所」と「武器蔵」や、赤門と表門の間にある「権門」に描かれている野面石垣と考えられる。福山城期の石垣は、第12図EPe-e'と思われるが、この石垣の多くは近代の積み直しの可能性が高い。なお、この石積みの直下には第12図SPe-e'の暗渠が埋設されている。

井戸：この地区は、コンクリートで井戸場が作られていた。そして、近世の石製井戸橋の上部に、おなじ平面規模でコンクリートの井戸橋を継ぎ足してあった。発掘の当初に、このコンクリート製井戸橋を取り除くため、小型のバックホーで引き上げたところ、この橋に近世の井戸橋がくっついて出てきた。近世の井戸橋の平面位置については、コンクリート製井戸橋を実測してあったので、ほぼこの位置でよいが、明確な井戸橋の据付レベルは判らない。掘り上げ後の、地山である井戸底中央の標高が17.82mであるので、石橋の高さ0.88mを合計すると井戸枠天端の標高18.70m程となる。そして、埋門裏の福山城期の平場の標高は18.76mであり、福山館期の平場の標高は17.93mである。

石製井戸橋の実測図を第14図1に示した。箱型にくり抜いた砂岩の底部に中央を偏して2尺×2.2尺の規模で底が抜かれている。また、長手の内法約5尺の中央2.5尺の位置から上場が4寸で、底面3寸幅の溝が壁に垂直に掘られている。石橋の大きさは長さ6尺、幅3.5尺で、高さは現存最高値で3尺ある。内法は長さ5尺幅2.6尺高さ2.3尺である。

埋門門柱礎石（第14図2）がSK-84Gridの福山城期地表面に転在していた。花崗岩製で上面にホソ穴が穿たれる。ホソ穴は、上場で長さ6.8寸幅2.4寸、下場で長さ6.5寸幅2寸あり、深さは約0.5寸である。

井戸西側石垣（第12図SPa-a'）にその姿を図を示した。トーン部分は近代の石積みである。この石垣は、「松前神社所蔵線図」（資料2-3、4）に描かれている井戸



西側の低い石垣と思われ、EPfのPointで西に直角に折れる。また、EPf-f'間にある石列は、北側の面がそろっており、石列の南側が高く、北側にある井戸の平場が一段下がるものと考えられる。また、この石垣の特徴的なことは、面の合い場部分のみハツリ面の中央は粗く成型している。この様な加工は、根石の上部の積み上げ石との合い場にはあるが、全石積みの例はこれまでにない。

3) 外堀呑口 (第15.16図)

K.W.: 堀底レベル、ヘドロ層レベル、水面レベル

○抄録

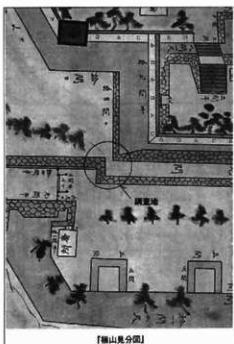
湯殿沢門東側の調査区から、二ノ丸を囲む外堀と、やや幅幅の狭い「堀廻」から流れてくる堀水を取り込む呑口部分が出土した。今回は部分的な調査であるが、その範囲でこれらの遺構の概要はつかめた。それぞれの規模は、外堀の堀幅が石垣下場間で14.2尺、外堀を折れた呑口の出隅での石垣下場間の堀幅が約9.5尺であった。また、今回の調査範囲では、堀水を落し入れる石垣構造(水戸違い)が発見されなかったで、「堀廻」と、外堀のW.L.が同じであった可能性が考えられる。

・外堀 (第15.16図)

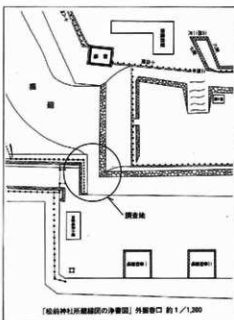
外堀はSN-71~72, SO-71~72の4 Gridにまたがって発見された。二ノ丸側の出隅は発見したが、三ノ丸側の入隅は今回調査できなかった。まず、土層堆積状況から述べる。

土層図: 第16図f-f'が外堀の土層堆積状況で、土層1)は近代の埋立であり、左端の石垣はこの時期に土層1)を掘り込み構築された。したがって、二ノ丸側からの崩れ土の堆積が認められず土層2.18)まで掘り込まれた可能性がある。土層2~10)は明治8年までの城取り壊し時に堆積したもので、土層2)には土層3~5)の石垣裏込めを包含している。土層11)は安政元(1854)年完成から取り壊しまでに堆積したヘドロ層である。ヘドロ層上面の標高は12.78mである。土層8)は土層11.13)を掘り込んでいることから、取り壊し時に根石まで取ろうとして石際を掘り下げたか、あるいは残っている堀水や石垣の隙間から出る湧水を排水させるための溝である可能性が高く、覆土は土層2)に良く似ている。外堀完成時の堀底は土層12)の上面である。土層13.14)は築城時の掘り込みに堆積したもので、この掘り込みは、おそらく外堀構築時における湧水処理のための排水溝と思われる。土層15.16)は地山である。土層17.18)は、石垣裏込めか二ノ丸盛り土の崩れたものと思われる。なお、この土層図での石垣間は、4.32m(14.25尺)である。

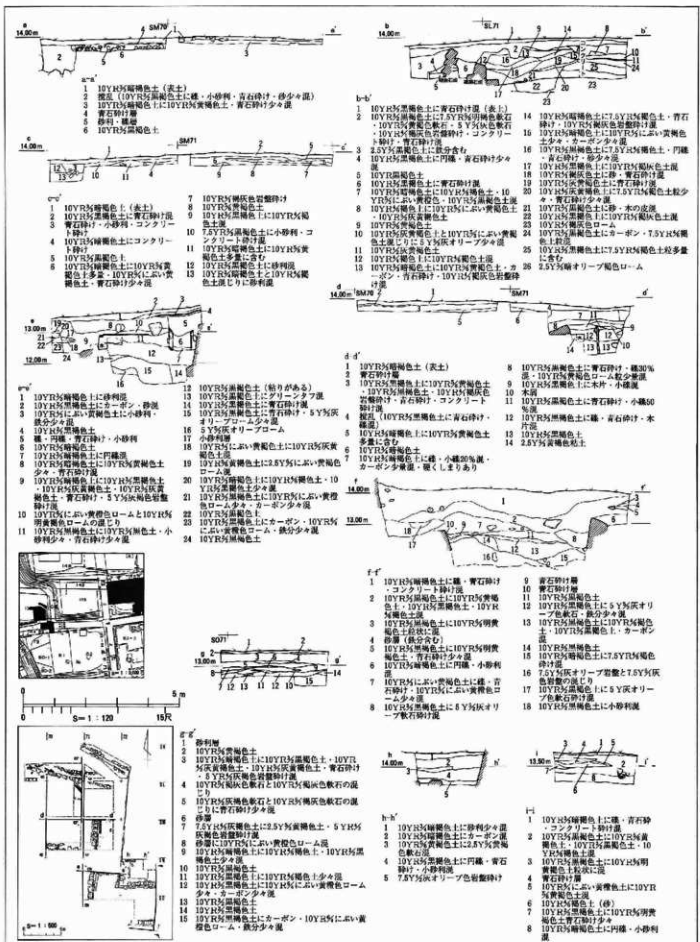
i-i')に石垣裏込めの土層堆積状況が判る。土層2)は、三ノ丸の盛り土でここに土層3~7)の裏込めが部分的に残っていた。土層8)は石垣裏込め砂利である。g-g')は、土層3)が福山城期の盛り土である。また、福山館期の最後期、福山城築城直前の地表面が土層4.5)の上面であることが外堀の掘り込み面(e-e')の土層20)から考えられる。福山館期に何度も盛り土をした状況がうかがえる。



【福山見分図】



【福山神社所蔵福山の浄土園】外堀呑口 約1/200



平面図・姿図：第15図(EPd-d')とEPf-f')を見ると石垣出隅の算木積み状況が判る。また、EPd-d')の石積み状況を見ると、東側からa、b)石までの石垣を積み、つぎに出隅の根石であるc)石から積み始めa、b)石までの間を石垣で埋めていくという、作業の手順が判る。

EPc-c')の横に渡した木材(梁材)と石垣面との間は、粘土を詰めている。

・呑口(第15.16図)

外堀よりやや幅の狭い堀が「堀廻」に向かって設置される。この堀の東面の石垣は二ノ丸の土居につづき「腰巻石垣」となっている。また、西面の石垣は途中で折れ西側に延び、「堀廻」の水止めの役割を担う。

土層図：第16図(e-e') 明治8年までの城取り壊し時の堆積土は土層8～11)までである。土層6.7)の堆積する桶を埋設した遺構は、土層8)の上面から掘り込まれているので明治8年以降に構築されたものと思われる。土層12)は築城から明治8年取り壊しまでに堆積したものとおもわれる。土層14)は、土層15)の上面から掘り込んだ、東面石垣の、根掘りに堆積した栗石である。なお、土層16)は地山で西面石垣は、このローム層から積み上げられる。したがって、この堀の石垣構築順序としては、西面石垣を積み上げた後に、土層15)を入れ、さらにこれを掘って東面石垣根掘りとし、東面石垣を積み上げたことになる。また、土層15)が土層16)に落ち込んでいる状況が見とれるが、これは工事初期の段階で堀底を段違いにし、高い段の西面の石垣から積み上げ、低い段は排水溝の目的があったのかも知れない。この堀は土層19)の上面から掘り込まれており、築城直前の、この付近の地表面の標高は13m程であったと考えられる。なお、石垣の面に添って据えられた木材(梁材)の天端は標高12.66mあり、土層12)の上面とほぼ等しい高さであり、この木材自体が土層12)の上部に埋まっているので、これが添えられた時期は築城以降の可能性が考えられ、この目的は木材と石垣の間に黄褐色粘土が詰められていることから、d-d')に見られるものと同様、石垣擁護のためと思われる。

d-d')では明治8年までの城取り壊し時の堆積土が土層8～12)までで、築城から取り壊しまでに堆積したのが土層13)である。土層13)はe-e')の土層12)と同じ土質である。堀底は土層12)の下面で、e-e')の土層16)と同じ地山ロームである。石垣はこの地山を掘り込み根石を据えて積み上げている。石垣に添った木材がヘドロ層に含まれないことから、これが添えられた時期は築城以降であることに間違いがなく、むしろ城取り壊しの時、その作業のために廃材を利用して敷設したとも考えられようが、わざわざ石垣との隙間に粘土を詰めている状況を考えると、取り壊し以前で、かなり取り壊しに近い時期に、石垣の補強を目的として敷設した可能性の方が高いと思われる。

b-b')は「堀廻」の水止めを目的とした石垣の土層断面を示している。土層1～7)は近代の堆積土である。次に古い方から述べると、最も古い地表面は土層25)の上面①で、自然堆積層と考えられる。その上層の土層24)は炭化物を含んだ盛り土であり、土層11)が次に新しい地表面②である。そして、②の時期にこれら掘り込んで土層22)の堆積する凹地ができる。凹地がこの土層22)の上面まで埋まり、

そこに柳を束ね（綱木？）敷かれてる。これは土層の堆積状況と、土層19.20)にグリーンタフ碎片が含まれることから、この柳を束ねた上には石垣があったものと考えられる。石垣があったときの地表面は②よりは高かったと思われ、少なくとも土層15)の上面以上と考えられる。そしてこの石垣を抜き取り、他の残存する石垣根石の配置関係から、福山城期と思われる石垣が積み上げられ、その裏込めとして土層12.16~18)が入られる。その時に土層9.13.14)が盛られる。城取り壊し時に上部の石垣がはずされることによって土層12)が崩れ落ちる。その後、明治期の石垣が土層6)を裏込めとして組まれる、という経過をたどったものと考えられる。さて、築城直前の地表面については、他の土層間との対比から、②の土層11)の上面と考えられる。それは、土層間e-e')の築城直前の地表面と、これを挟む、地表面下の福山館期の堆積土と、地表面上に盛られた築城時の盛り土の土質が、②の土層11)を挟む土質と良く似ていることと、標高がe-e')では13mで、②では13.2mとかなり近いことから、これらの地表面は同時期の可能性が高いものと思われる。すると、築城から廃城までに二度石垣を積み上げたことが想定される。

平面図・姿図：第15図 姿図を中心に平面図の遺構配置関係を描くことにする。EPh-h')は呑口の東面石垣で、二ノ丸側の土居に続く鉢巻石垣であり、トーンで示した部分は城取り壊し時に残った石垣上に、積み直された石垣である。取り壊されなかった石垣の規模は、EPf') Pointの出隅からSLライン近くまでの、約13.5m(44.55尺)が現況で確認された。また、掘底の幅は出隅の根石の下場との間およそ9.5尺程ある。堀の西面の石垣については、EPc-c')とEPa-a')に示すように、石垣を押さえるための木材が水平に据えられている状況が判る。EPa-a')では杭で木材を押さえている状況が判り、平面図SM-71Gridを見ると、石垣沿いに杭列が認められることから、石垣沿いに連続して、この木材が据えられていたであろうと考えられる。EPn-n')の石垣列は、EPk-k')の石垣に連続するように配置されているが、石積み方法が全く異なることと根石の深度が異なることから、EPk-k')のトーンで示した部位は廃城後に積まれた可能性がある。また、EPl-l')はEPn-n')の石垣列を取り壊した後に積み上げられたもので石垣内側の覆土の状態から明治以降と考えられる。さらにこの石垣も流入する土砂に埋まり上部を取り壊し、平面図SK-71Gridに見られる、側石をコンクリートで固めた開渠が作られる。なお、Epm-m')の石列は据付レベルから近代(八重亭)のものと考えられ、面は揃っているが天端が揃わず、用途は不明である。平面図SM-70Gridの試掘溝から出土した石列は、来年度調査範囲を拡げ明確にしたい。

4) 遺構小括

・番所廻り

この地区は、遺構面の浅いため近代の擾乱が著しかったが、幸いにも布石が出土したので、番所遺構の位置はある程度つかむことができたが、その規模については土台内部に敷かれた砂利しか手掛かりが無かった。また、外堀沿いの土居の土居尻の位置も、城取り壊し時に削り取られ全く判らない状況であった。

築城時の地表面はほとんど残っていなかったが、それぞれ部分的に残っていた遺構の天端からある程度推測することが出来る。それは、布石天端が18.19mで、土間縁石天端が18.16mそして石柵棹石の天端が18.13m、石柵西側の急こしらえの暗渠蓋石の天端が18.14mであることから、当時のこの付近の地表面の標高は、18.13mよりやや下がるか同程度と思われる。また、昨年度の調査で、追手門渡り櫓の門柱礎石の中心の天端高が18.39mで、櫓台石垣礎石の石垣立ち上がり部の標高が18.24mであった。

番所南側の二ノ丸土居は、今年度の升形の調査で、その土居尻の石垣がSMラインのやや南側を通るであろうと思われるが、土層観察からはその痕跡が認められなかった。

・追手升形廻り

開渠、暗渠から取り込まれた雨水は、外堀に排出されることが判明した。外堀の裏込めに浸透させるか、吹き出し口を設けるかによるが、その終端の標高は16mよりやや下がるものと思われる。外堀の水面レベルは、城東側にある三本松土居の東側、外堀橋の南側の中仕切部（史跡福山城 X1993.3 PP. 21-24）のオーバーフロアの標高が、中仕切部の中央の溝底面で14.7mあるので、外堀の水面は14.7mより上がらない。なお、外堀終端部のオーバーフロー高は14.6m（前掲書PP. 15-20）である。したがって、排水が外堀石垣から空中に吹き出した場合は、1m以上落下することになるとされる。

升形平場の雨水は、地表を這って二ノ門にすべて集中するように、水勾配がとられている。おそらく二ノ門に集中した雨水は、ここに排水のための遺構が全く検出されなかったことから、二ノ門の土間を通るのではなく、両脇の石垣根掛りの栗石に浸透させ根掛り内を抜けて外堀の裏込めに浸透させ、排出されていたのではないかとされる。また、この升形平場は、あまり水が溜まらず、乾き易いことを、発掘調査中に実感した。一つには薄く張ったロームの上に砂利を敷いていることと、水勾配のとりにかたがよいこと。もう一つには地山のローム層を削り取り、岩盤の上にある、厚く堆積した岩盤の砕けた土層上に平場を構築したことによって、そもそも地下水位が低く、地下水が浸透しやすかったことが考えられる。

二ノ門の構築は、旧赤門の地盤を掘り下げて構築された可能性がある。その理由としては、二ノ門の裏側の平場のSLライン（第10図）ぐらいから急に勾配が強くなり、勾配のある橋で外堀を渡り三ノ丸平場の岸まで届かせなければならぬからである。端的に云えば、橋にはやや起りが付くと思われるが、橋の勾配をなるべく緩くとりたかったので、途中の二ノ門の基礎レベルを下げたと考えられるのである。

さて、『福山城見分図』の升形中央部に書かれている「拾七間半」(105尺)は、二ノ門を通る市北の、多門下升形石垣から外堀橋の三ノ丸側までの距離であることが、発掘調査と現況図の対比から判明している。これを調査Gridの87ラインに当てはめると、多門下升形石垣下場から39尺(6間半)で、勾配が強くなるSLライン付近になり、SLライン付近から残り66尺(11間)で三ノ丸側の橋の端部に達することが判明する。なお、この部分の三ノ丸平場の調査をしていないので明確には出来ないが、これまでの調査(史跡福山城Ⅲ 1996.3 PP.25-26)の限りでは標高15.3m程であり、SLラインの山升形平場の標高が17.7m程であるので、比高差は2.4m(8尺)程になると思われる。

埋門の扉の後ろ側に、根掘りが見えられ、他の石垣根掘りと同時期・規模に掘られていることから、扉の後ろ側を石垣で塞いでいた可能性が考えられる。絵図の対比によって、ここを通過できるように描いているのは、初期設計段階の「松前城」図だけである。この上層の石垣高は東側が8尺で、西側が6尺である。天端が同じ高さであることは土層観察から判明しており、東側と西側では平場の高さが2尺異なる。埋門両脇の石垣間は8尺と考えられるので、これを渡す切り石は8尺以上必要であると思われる。

井戸の構築年代は福山城期であることがほぼ確実となった。ただ、『松前自沖口至奉行所図』の「赤門と表門の中間にある「橋門」」に描かれている井戸の位置が今回検出した井戸と同じ位置であることは、井戸枠を取り外した際に、その掘孔の西面に野面石垣が見えていたことから間違いのないものと思われる。さらにこの絵の井戸の平場は標高17.93mぐらいで、この城期井戸底が17.82mであったので、石製井戸枠の底に開いていた、およそ2尺四方の穴の下には、調査では廃城後の土砂が堆積していたこともあって気付かなかったが、福山館期の井戸枠があったのかも知れない。

・外堀呑口

外堀・呑口のヘドロ層の上面の標高は12.7~12.8mである。平成5年度までに調査した外堀のヘドロ層の標高は13.2~13.3m程あり、約+0.4~0.6mの差がある。それぞれのヘドロの堆積する厚さは、今回の調査では0.3~0.6mで、平成5年度の調査場所では0.3~0.4mほどと、それほど差はない。掘底の標高を比較すると今回が12m~12.6mで、これまでが12.6~12.8mの間であることが判明し、同じく外堀の終端近くの中仕切部の掘底の標高は12.90mである。0~0.9m今回調査した地点の方が低く、このように掘底、ヘドロとも今回調査した場所は標高が低いと言える。

さて、オーバーフローの標高14.7mを、今回の調査区に照らし合わせると、現在の地表面より0.7~1.3m高くなり石垣は更に1~2尺高いので、最低でも現在の地表から1~1.5m高い標高15m付近に石垣天端があったことになる。これは、現在の「堀廻」の地形と水位、残っていた石垣裏込めの技術的な問題から、当時の水位が前述の位置であったと考えることは不可能と思われる。そこで、同じ水面下であれば、ヘドロ層の上面は、水平に堆積すると考えられることから、両者は仕切られ、水面の標高が異なっていた可能性が非常に高いと思われる。そうすると、今回調査した外堀位置よりも東側の外堀内に、中仕切(水戸違い)が少なくとも一か所以上

あり、水面調整をしていたことが考えられる。

今回の調査範囲では「堀廻」と呑口との間に「水戸違い」が発見されなかったことで、「堀廻」と外堀の水面の標高は同じと考えられる。現在の「堀廻」水位は13.5 m程で、オーバーフローの標高が14.7mであることから、現況では1.2m（4尺）水面の標高差があることになる。オーバーフローの標高は変えることが出来ないで、「堀廻」水位をどこまでオーバーフローの標高に寄せることが可能かということと、外堀に中仕切（水戸違い）がいくつあったのが重要となる。また、現在の「堀廻」の地形から考えて、あと2尺水面を上げるのは難しいような気がする。なお、今回調査した地区は来年度も調査を計画しているので、その結果をまけて結論を出したい。

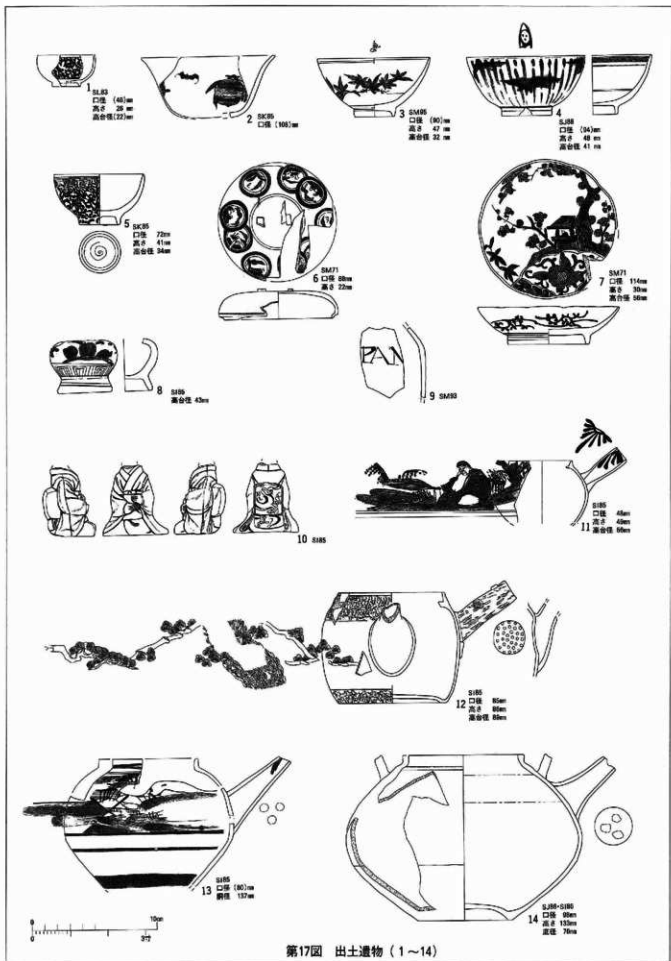
2. 出土遺物

今年度の調査区から出土して遺物の種類、点数は、第1表（P.3）に示したとおりである。全体として出土点数が少なく、近代の遺物が多く出土したことが今回の特徴と言える。また、東北地方産の陶磁器類が目立つ。以下に、図示した遺物の特徴を表にする。

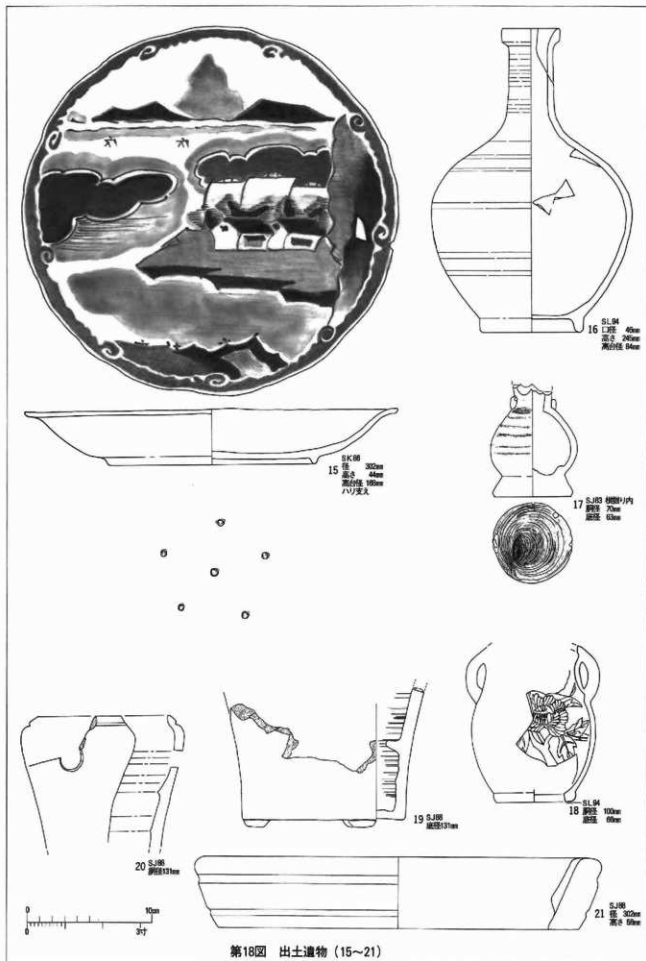
図版番号	出土地区	器種	種別	産地	年代	文様・その他
17-1	SL-83	蓋物	磁器	肥前	19世紀前半	染付、蛸巻草文
17-2	SK-85	碗	磁器	肥前	17世紀	染付、振舞文、口縁：端反り、焼成不良
17-3	SH-95	碗	磁器	肥前	18世紀	染付、見込銘有り、下半肉厚
17-4	SJ-88	碗	磁器	瀬・美	幕末	染付（コバルト）、見込文様有り、高台内肉薄
17-5	SK-85	碗	陶器	東北	幕末・明治	
17-6	SM-71	蓋	磁器	肥前	幕末	染付、外懸唇口出土
17-7	SM-71	皿	磁器	肥前	18世紀	染付、外懸唇口出土
17-8	SI-85	瓶	磁器	肥前	18世紀	染付、
17-9	SM-93	瓶	陶器	波佐見	幕末・明治	
17-10	SI-85	人形	磁器			中空で、体前部と後部を張り合わせ、手を取付けている。白磁に金泥、コバルト、朱の焼き付
17-11	SI-85	急須	磁器	東北	幕末・明治	染付、
17-12	SI-85	土瓶	陶器	東北	幕末・明治	
17-13	SI-85	土瓶	陶器	東北	幕末・明治	
17-14	SI-85	土瓶	陶器	東北	幕末・明治	
18-15	SK-86	皿	磁器	肥前	18世紀	染め付け、ハリ支え、墨弾き
18-16	SL-94	徳利	陶器	東北	幕末・明治	
18-17	SJ-88	仏花瓶	陶器	東北	19世紀前半	福山城治手形石垣模撰り出土
18-18	SL-94	花瓶	素焼き		明治・大正	
18-19	SJ-88	碁炉	素焼き		幕末・明治	
18-20	SJ-88	碁炉	素焼き		幕末・明治	
18-21	SJ-88		素焼き		幕末・明治	

図版番号	出土地区	器種	規格 (mm)	重さ (g)	材質	年代	文様・その他
19-22	SK-70	箸	247×5.1×5.2	28	銅	明治	外懸唇口出土
19-23	SN-88	鏡	84.8×85.2×2.1	66.4	銅	江戸中期	梅鉢、「人見和泉守重次」銘、福山館期土器下出土
19-24	SM-71	銭	49.3×32.8×2.5	20.5	銅	幕末	「天保通寶」、「當百」花押の面の地に朱、
19-25	SJ-86	筒玉	38.9×38.9	350	鉛	幕末	
19-26	SJ-86	硯	93.8×44.9×11.2	85.8	スレート	幕末	
19-27	SJ-86	硯	79.4×44.4×9.5	63.1	スレート	幕末	
19-28	SN-72	硯	153.5×58.4×19.9	330	泥岩	幕末	「赤間関」銘
19-29	SI-85			260	ガラス	明治・大正	時計飾り台

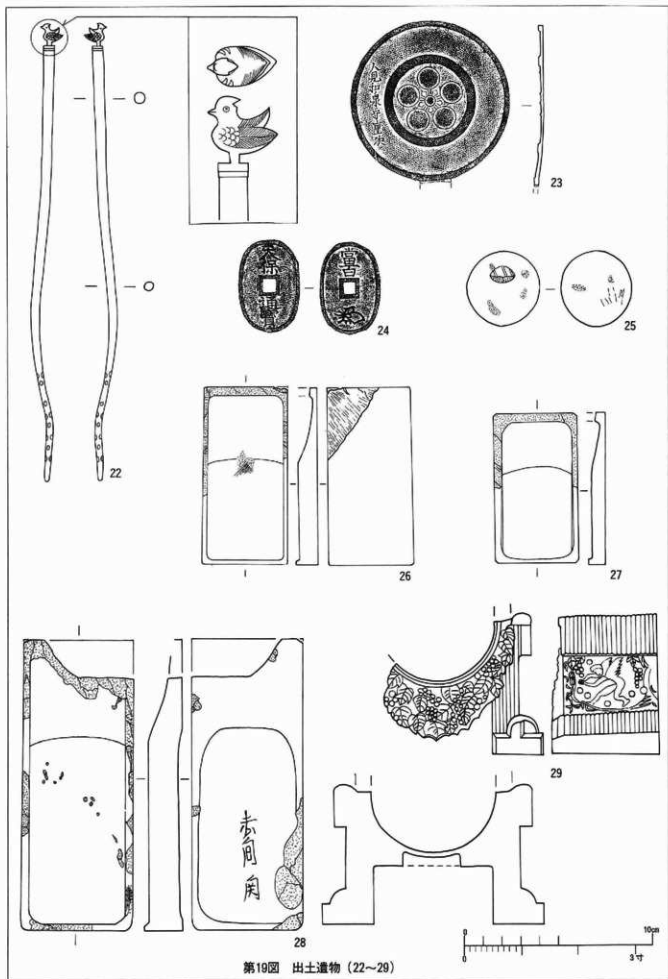
第2表 出土遺物観察表



第17図 出土遺物（1～14）



第18回 出土遺物 (15~21)



第19圖 出土遺物 (22~29)

Ⅲ 各種調査

1 旧松城小学校解体古材再調査

大 萱 昭 芳

今回の再調査の目的は、旧松城小学校解体時に保管された古材に残る痕跡を確認し、本丸御殿復元の可能性を探ることである。

昭和59年度「旧松城小学校解体事業調査報告書」の古材実測図に記載された内容と保管古材を対比させながら調査し、総数314本を順次野外に並べ、断面寸法・面内寸法・四面の表面状況・仕口欠込の状況について確認した。

調査は平成8年8月22日から5日間にわたり平井型（昭和女子大学教授）と大萱昭芳（札幌市立高等専門学校教授）の2名が松前町教育委員会文化財課の協力のもとに行った。

調査結果を「旧松城小学校解体古材部材リスト」として表に示す。断面寸法の小さい順に記したが、古材実測図の記録に変更追加の生じた部材は314例中272例に上り、仕口欠込の状況から横架材と垂直材の区別、横架材の上下の判定をした。判定の困難な部材もあったが、横架材と考えられる部材が173例、垂直材と考えられる部材が141例となり、それぞれの特徴を記した。共通した特徴の部材群もあり、部分的復元の可能性を感じさせるが、前の福山館からの転用材と思われる加工痕も認められ断定することはできない。

今回の調査は短時間でいった予備調査と位置付けられ、本丸御殿の復元研究のためには再度本格的で詳細な調査が必要と考えられる。

番号	断面寸法	野帳記号	変更追加	棟梁材	垂架材	非定使用箇所	特 徴
1	1.9*4.4	80 a	○	○		鴨居	上下面引き違い戸溝
2	2.0*4.9	90	○	○		根太受	片側面根太受3.0巾欠込3コ@1.62
3	3.0*3.8	314 a	○	○		梁太	上面空鑿1コ、両側面釘の溝各1コ（面戸用?）
4	3.3*5.2	64	○	○		兵押	燕押引加工、側面釘受6.3巾欠込1コ
5	3.3*5.5	91	○	○		棟木	上面棟木受1.8巾欠込3コ@15.0
6	3.3*5.1	82	○	○		桁/母屋	上面棟木受2.0巾欠込4コ@15.5
7	3.4*3.7	1	○		○	柱	3面は老穴列/内1面1本溝
8	3.65*3.65	オ	○		○	柱	対2面貫穴列/2本溝/内法材欠込各1コ、1面横材欠込3コ、面2.5
9	3.85*4.25	316 a	○		○	柱	面2面は老穴/内1面2本溝、
10	3.9*4.0	89 a	○		○	柱	対2面貫穴列/1本溝、面皮仕上
11	4.0*4.0	76	○		○	柱?	対2面貫穴、思書:本や三銅手
12	4.0*4.0	85 a	○		○	柱	面2面1本溝/は老穴各3コ、1角袖手拵仕上
13	4.0*5.3	93 a	○	○		桁?	対2面小は老穴各2コ@31.8/内1面1本溝・一部小穴列@3.0
14	4.0*6.4	サ			○	外壁柱	対2面大貫穴各3コ・小は老穴各2コ/1部2本溝/内法材欠込、1面横材欠込1コ、他面全面腐女人
15	4.05*4.1	89 b	○		○	柱	面2面は老穴列@30.0/内1面皮仕上・1本溝
16	4.15*4.15	84	○		○	柱	面2面は老穴列/部分1本溝、1面は老穴1コ/横材欠込1コ
17	4.2*5.9	211	○		○	柱 (5.9*5.9?)	対2面貫穴列/側面溝欠込1コ/内法材欠込/内1面1本溝/他面手拵落し、対2面は老穴列/内法材欠込/内1面水切溝欠込1コ、棟材欠込1コ、面内5.4 (5.3)
18	4.3*4.5	79	○	○		桁	上面柱は老穴1コ/最上6.0巾欠込/屑落、下は仕上1コ
19	4.3*4.5	78	○	○		入隅木	上面谷加工/前衣、下面軒釘受欠込1コ、両側面棟木欠込列@23.0
20	4.3*5.2	198	○		○	柱 (5.2*5.2?)	対2面は老穴列/内1面1本溝、対2面貫穴各2コ/内1面手拵落し
21	4.3*5.85	222	○		○	柱 (5.85*5.85?)	対2面貫穴各3コ/内1面手拵落し/他面内法材欠込
22	4.3*6.05	202	○		○	柱 (6.05*6.05?)	対2面貫穴列/手拵落し/内1面は老穴3コ
23	4.3*6.05	221	○		○	柱 (6.05*6.05?)	対2面貫穴列/内1面内法材欠込/他面手拵落し、面内5.5
24	4.3*6.1	226	○		○	柱 (6.1*6.1?)	対2面貫穴各2コ・手拵落し/内1面は老穴列/他面手拵欠込1コ、対2面横材欠込各2コ/内法材欠込
25	4.3*6.2	223	○		○	柱 (6.2*6.2?)	対2面貫穴各3コ/1面部分黒色・内法材欠込/他面手拵落し、面内5.6 (6.2)
26	4.3*6.2	225	○		○	柱 (6.2*6.2?)	対2面貫穴各2コ・は老穴列/手拵落し、対2面貫穴各3コ/部分2本溝/内法材欠込
27	4.3*6.3	213 a	○		○	柱 (6.3*6.3?)	対2面大貫穴各3コ/内1面小穴列・内法材欠込
28	4.35*6.25	204	○		○	柱 (6.25*6.25?)	対2面貫穴各3コ/手拵落し、1面貫穴1コ/内法材欠込
29	4.4*4.9	81	○	○		桁?	1面は老穴一コ/屑落、下は老穴一コ/1本溝
30	4.4*5.3	199	○		○	柱 (5.3*5.3?)	対2面貫穴各3コ/部分1本溝/内法材欠込、1面貫穴欠込1コ/内法材欠込、対面手拵落し
31	4.4*5.3	212	○		○	柱 (5.3*5.3?)	対2面部分手拵落し、3面は老穴、2面内法材欠込、1面部分小穴@5.5

第3表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(1)

番号	断面寸法	詳細記号	変更追加	橋脚材	取付材	新定使用箇所	特 徴
32	4.4*6.0	231 a	○	○	○	柱 (6.0*6.07)	対2面大貫穴各3コ/内1面内法材欠込・小穴列・着色/他面手磨し、内面5.45 (6.0)
33	4.4*6.05	230	○	○	○	柱 (6.05*6.057)	対2面大貫穴各3コ、1面横受材欠込1コ/内法材欠込
34	4.4*6.2	209 a	○	○	○	柱 (6.2*6.27)	対2面大貫穴各3コ/側面穴各1コ/手磨し、1面は老穴列/内法材欠込
35	4.4*6.2	218	○	○	○	柱 (6.2*6.27)	対2面大貫穴各3コ・は老穴各2コ/手磨し
36	4.4*6.25	225	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面大貫穴各2コ/内1面は老穴列・2本溝/他面は老穴・部分2本溝、対2面は老穴各3コ/手磨し
37	4.5*4.6	59	○	○	○	邊梁	上面は老穴4コ・垂木受3.0巾欠込4コ@30.0、下面4.0巾削り欠込1コ/1本太溝/は老穴@30.0
38	4.5*4.6	203	○	○	○	柱 (6.0*5.07)	対2面大貫穴列@25.0/1本溝、対2面小貫穴列、面0.3
39	4.5*5.25	219	○	○	○	柱 (5.25*5.257)	対2面貫穴列・部分1本溝/内法材欠込、対2面手磨し上/内1面横受材欠込1コ/内法材欠込
40	4.5*5.25	224	○	○	○	柱 (5.25*5.257)	対2面貫穴列/内1面部分1本溝・内法材欠込、対2面内法材欠込、内面4.8(5.25)
41	4.5*5.25	305	○	○	○	橋木	上面両側平・突起上、片側面突起上
42	4.5*5.5	136	○	○	○	入隅木?	上面谷加工、下面は老穴3コ@60.3/横受付欠込1コ
43	4.5*5.8	233	○	○	○	柱 (5.8*5.87)	対2面大貫穴列/手磨し、対2面内法材欠込/部分着色/内1面横材受材欠込1コ
44	4.5*5.9	208	○	○	○	柱 (5.9*5.97)	対2面貫穴列/内1面部分2本溝/他面手磨し、対2面は老穴列/内法材欠込
45	4.5*6.0	k	○	○	○	柱 (6.0*6.07)	対2面手磨し/内1面側垂穴込1コ・は老穴1コ、1面は老穴2コ、対面横材受欠込1コ
46	4.5*6.0	200	○	○	○	柱 (6.0*6.07)	対2面貫穴列@20.0/内1面小穴列・内法材欠込/他面手磨し、対2面内法材欠込、内面5.45 (6.0)
47	4.5*6.0	205 a	○	○	○	柱 (6.0*6.07)	対2面貫穴列/内1面小穴列・部分1本溝・内法材欠込/他面手磨し、1面は老穴1コ/内法材欠込/部分分化、面0.3
48	4.5*6.1	205 b	○	○	○	柱 (6.0*6.07)	対2面貫穴列@20.0・は老穴各2コ/小穴列・内法材欠込/内1面部分1本溝、対2面手磨し/内1面内法材欠込、内面5.45 (6.0)
49	4.5*6.1	224	○	○	○	柱 (6.1*6.17)	対2面貫穴列/手磨し/内1面内法材欠込・部分1本溝、1面は老穴列/内法材欠込/横材受材欠込1コ
50	4.5*6.2	210	○	○	○	柱 (6.2*6.27)	対2面貫穴各1コ/手磨し/内1面は老穴1コ/他面都受欠込1コ、1面は老穴列@20.0・2本溝
51	4.5*6.2	229	○	○	○	柱 (6.2*6.27)	対2面貫穴1各1コ・は老穴各1コ/内1面貫穴列・内法材欠込、内面5.65 (6.2)
52	4.5*6.2	232	○	○	○	柱 (6.2*6.27)	対2面貫穴列/内1面小穴列・内法材欠込/他面手磨し、内面5.6 (6.2)
53	4.5*6.25	215 a	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面貫穴各1コ/内法材欠込/部分1本溝、対2面手磨し/内1面は老穴列@19.5
54	4.5*6.25	209 b	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面小貫穴列/内法材欠込/内1面は老穴列@20.0、対2面小貫穴列/内法材欠込/内1面側垂穴込/他面手磨し、内面5.75 (6.25)
55	4.5*6.25	210	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面貫穴各3コ/内1面手磨し
56	4.5*6.25	216	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面貫穴各3コ・小穴列/部分1本溝/内法材欠込、対2面大貫穴各1コ/手磨し
57	4.5*6.25	217	○	○	○	柱 (6.25*6.257)	対2面貫穴列・は老穴各2コ/手磨し、1面は老穴列/部分1本溝/手磨し、他面は老穴2コ/内法材欠込
58	4.5*6.3	197	○	○	○	柱 (6.3*6.37)	対2面貫穴列/内1面手磨し、対2面大貫穴各1コ・は老穴列/内法材欠込/内1面横材受材欠込1コ
59	4.5*6.3	207	○	○	○	柱 (6.3*6.37)	対2面貫穴列/手磨し、対2面小貫穴列/内1面小穴列・内法材欠込/横材受欠込1コ
60	4.5*6.3	215 b	○	○	○	柱 (6.3*6.37)	対2面貫穴各3コ/手磨し、1面内法材欠込1コ
61	4.5*6.3	227	○	○	○	柱 (6.3*6.37)	対2面は老穴列/内1面部分1本溝・内法材欠込・部分着色/他面手磨し、対2面内法材欠込/1面横材受欠込1コ
62	4.5*6.3	231 b	○	○	○	柱 (6.3*6.37)	対2面貫穴列/内1面小穴列・内法材欠込/他面手磨し、対2面貫穴各1コ/内1面は老穴2コ・内法材欠込/他面横材受11.9成欠込1コ・H7.7欠込1コ
63	4.5*6.4	206	○	○	○	柱 (6.4*6.47)	対2面貫穴各3コ/内1面内法材欠込/他面手磨し、内面5.8 (6.4)
64	4.7*5.3	80 b	○	○	○	柱/束	4面貫穴、1面小穴列
65	4.7*9.0	49	○	○	○	桁?	上面はは老穴1コ・は老穴列/1本溝、下面はは老穴2コ・は老穴列、内面側垂受欠込1コ、両端4.0巾
66	4.8*4.8	88	○	○	○	柱	4面小貫穴各2コ、隣2面1本溝、面0.4、良材4面仕上、墨・本や五箇平
67	4.9*5.0	287	○	○	○	桁/母屋	上面側平、下面はは老穴各1コ、側1面手磨し
68	4.9*5.6	m	○	○	○	橋木?	上面はは老穴1コ・は老穴1コ/肩垂・部分手磨し、下面はは老穴1コ、着色
69	4.9*5.8	311	○	○	○	桁/母屋	上面垂木欠込2.0巾@15.0/肩垂・手磨し、側面横材補修
70	4.9*9.9	290	○	○	○	削突/桁	上面切落、下面はは老穴1コ・3.5*6.1柱成/1本溝
71	5.0*5.0	n	○	○	○	桁?	上下面はは老穴各1コ・は老穴各1コ
72	5.0*5.0	77	○	○	○	柱 (5.0*5.0)	対2面貫穴、隣2面横材受欠込各1コ、4面内法材欠込、面成し@146146
73	5.0*5.0	146	○	○	○	柱	1面小貫穴列@20.0、手磨し上
74	5.0*5.0	288	○	○	○	柱 (5.25*5.25)	対2面貫穴各2コ/部分1本溝、1面内法材欠込、内面4.9 (5.25)
75	5.0*5.0	316 b	○	○	○	柱 (5.0*5.0)	対2面貫穴列/内1面内法材欠込1コ、内面4.5
76	5.0*5.35	283	○	○	○	削突?	上面はは老穴1コ・は老穴2コ@63.5/1本溝/部分手磨し上、下面はは老穴1コ/小穴列@6.5
77	5.0*9.0	67	○	○	○	梁	上面はは老穴1コ・は老穴列@20.0/該横材受3.0巾欠込、下面はは老穴1コ/は老穴列(新?)@20.0
78	5.1*5.2	85 b	○	○	○	柱 (5.1*5.2)	対2面貫穴列、1面横材受割り欠込1コ、面0.4、着色仕上
79	5.1*5.5	24	○	○	○	軒突/母屋	上面垂木欠込15.0、下面はは老穴1コ、内面側垂受欠込1コ
80	5.1*5.5	302	○	○	○	軒突/母屋	上面垂木欠込15.0
81	5.1*6.0	149 a	○	○	○	柱	上下面はは老穴各1コ/は老穴各1コ、両面手磨し
82	5.2*5.2	63	○	○	○	床柱 (5.2*5.2)	側面化粧柱、1面、対2面内法材欠込/貫穴各2コ/内1面は老穴列、対2面貫穴各1コ/内1面は老穴列・小穴列・部分1本溝、他面床架欠込1コ・落傷欠込1コ
83	5.2*5.25	270 a	○	○	○	橋木	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/両側平・中央部手磨し、下面はは老穴1コ
84	5.2*5.3	p	○	○	○	?	上下面はは老穴各1コ/1本溝
85	5.2*5.3	161 a	○	○	○	柱 (5.3*5.3)	対2面貫穴各3コ/部分1本溝/内法材欠込、1面内法材欠込/横材受欠込1コ、他面部分分化内面4.9 (5.3)
86	5.2*5.4	190	○	○	○	柱 (5.2*5.4)	隣2面は老穴列@21.0・1本溝/内法材欠込、1面横材受欠込1コ、内面4.9 (5.2) 5.1 (5.4)
87	5.2*5.45	240 a	○	○	○	橋木	上面はは老穴1コ/束は老穴2コ@63.3/両側手磨し、下面はは老穴1コ
88	5.2*5.5	368	○	○	○	橋木	上面はは老穴1コ/束は老穴2コ@63.3/両側手磨し、下面はは老穴1コ
89	5.25*5.25	155	○	○	○	柱 (5.25*5.25)	対2面貫穴各2コ・は老穴/内1面内法材欠込・横材受欠込1コ・部分分化・着色/他面部分1本溝、対2面内法材欠込/内1面部分1本溝・部分分化、面0.4
90	5.25*5.25	274	○	○	○	軒突/母屋	上面はは老穴1コ/垂木欠込@15.9、下面はは老穴1コ/1本溝/該横材欠込、片側面横材受欠込1コ

第4表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(2)

番号	前面寸法	軒組記号	家 屋根	棟 屋根	軒 屋根	扉 使用箇所	特 徴
91	5.25*5.3	159	○	○	○	柱 (5.3*5.37)	対2面貫穴各4コ/部分1本溝/内法材欠込/内1面横材受込1コ、1面は老穴列/横材受込1コ、対面内法材欠込/内1面横材受込1コ、内面4.9(5.3)
92	5.3*5.3	o	○	○	○	外壁柱 (5.3*5.3)	対2面貫穴列@18.0・1本溝・溝外風化/斜め溝欠込/大横材受込1コ、対2面は老穴/1面溝欠込、風化、内面5.0
93	5.3*5.3	87	○	○	○	柱 (5.3*5.3)	対2面貫穴列/部分1本溝/内1面内法材欠込1コ、
94	5.3*5.3	94	○	○	○	束? (5.3*5.3)	4面貫穴、対2面手拵なし
95	5.3*5.3	95	○	○	○	柱 (5.3*5.3)	4面貫穴各1コ、1面部分1本溝、面なし
96	5.3*5.3	123	○	○	○	外壁柱 (5.3*5.3)	対2面貫穴各3コ/部分1本溝/内1面内法材欠込、1面横材受込1コ・10.0成溝/風化、
97	5.3*5.3	127	○	○	○	柱 (5.3*5.3)	対2面は老穴列/内法材欠込/内1面部分1本溝、対2面は老穴列/内法材欠込/内1面部分1本溝/横面横材受込1コ、内面4.95
98	5.3*5.3	149 b	○	○	○	柱 (5.3*5.3)	対2面貫穴各3コ/部分1本溝/内法材欠込、対2面内法材欠込/内1面横材受込4.0巾欠込1コ、内面4.8
99	5.3*5.3	315 a	○	○	○	束? (5.3*5.3)	4面貫穴、対2面小穴列
100	5.3*5.5	118	○	○	○	柱 (5.3*5.5)	対2面貫穴各2コ/は老穴列/部分1本溝/内1面横材受込3コ、対2面貫穴各2コ/内1面横材受込1コ・斜め貫穴1コ/横面横材受込1コ・横材受込1コ・部分溝欠
101	5.3*5.5	130	○	○	○	外壁柱 (5.3*5.5)	対2面貫穴各4コ/は老穴列@18.0/部分1本溝/内1面横材受込2コ、1面貫穴2コ/内法材受込/風化、対面は老穴列/横材受込11.7@11.6@0.8
102	5.3*5.5	187	○	○	○	外壁柱 (5.3*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠込/部分風化、1面横材受込1コ、対面は老穴列/溝欠込風化、内面4.8
103	5.3*5.5	269 a	○	○	○	棟木	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.2/西側中央部手拵なし、下面はは老穴1コ
104	5.3*5.5	304	○	○	○	桁	上面南側・手拵なし、下面小は老穴列@22.5、片側面手拵なし
105	5.3*5.5	313 a	○	○	○	桁/母屋	上面はは老穴2コ/前溝、下面はは老穴2コ
106	5.3*5.6	149 e	○	○	○	軒枅	上面垂木欠込@15.0/隅木受込1コ、下面横材受込1コ
107	5.3*5.6	318 a	○	○	○	棟木	上面はは老穴1コ/は老穴2コ/両側中央部手拵なし、下面はは老穴1コ、両側面手拵なし
108	5.3*5.6	361	○	○	○	棟木	上面はは老穴1コ/部分1本溝/両側溝、下面はは老穴1コ/部分1本溝/は老穴2コ@63.2
109	5.3*6.2	カ	○	○	○	外壁柱 (5.3*5.6)	対2面貫穴列@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ/横材受込1コ
110	5.3*6.2	128	○	○	○	柱 (5.3*6.2)	対2面貫穴各2コ/は老穴列@18.0/内1面1本溝/後面部分1本溝、1面はは老穴列@18.0/1本溝
111	5.35*5.35	116	○	○	○	柱 (5.35*5.35)	対2面貫穴列@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面大横材受込10.0成欠込1コ、対面溝欠込1コ、内面4.95
112	5.4*5.4	a	○	○	○	束? (5.4*5.4)	4面貫穴各2コ
113	5.4*5.4	113	○	○	○	柱 (5.4*5.4)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ、内面5.0
114	5.4*5.4	139	○	○	○	柱 (5.4*5.4)	対2面貫穴各2コ/内法材受込/内1面部分1本溝/後面2本溝、1面横材受込4.0巾欠込1コ・風化、対面は老穴/部分1本溝/内法材受込1コ・角黒色、内面4.9
115	5.4*5.4	188	○	○	○	柱 (5.4*5.4)	対2面貫穴列@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ/部分風化、内面4.9
116	5.4*5.4	298	○	○	○	桁	上面はは老穴1コ/垂木欠込@16.0、下面1本溝、片側面貫穴受込1コ
117	5.4*5.5	115	○	○	○	柱 (5.4*5.5)	対2面貫穴列@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ/部分風化/溝上部腐食、対面横材受込1コ
118	5.4*5.5	161 b	○	○	○	柱 (5.4*5.5)	対2面貫穴列@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ/部分風化/溝上部手拵なし、
119	5.4*5.5	177	○	○	○	柱 (5.4*5.4)	対2面貫穴@18.0/1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ
120	5.4*5.5	234	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.5/両側手拵なし、下面はは老穴1コ
121	5.4*5.5	236	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.5/1本溝/溝内部手拵なし/両側溝、下面はは老穴1コ/小穴列
122	5.4*5.5	237	○	○	○	桁/母屋?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.3/溝上部手拵なし、下面はは老穴1コ
123	5.4*5.5	239	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@62.5/両側手拵なし/釘跡列@15.5、下面はは老穴1コ
124	5.4*5.5	240 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.5/1本溝/両側溝内部手拵なし、下面はは老穴1コ/小穴列@8.7
125	5.4*5.5	265	○	○	○	棟木	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.2/両側溝、下面はは老穴1コ
126	5.4*5.5	267	○	○	○	棟木	上面はは老穴1コ/は老穴2コ/1本溝/両側溝、下面はは老穴1コ/小穴列@8.8、両側面手拵なし
127	5.4*5.5	307	○	○	○	棟木	上面両側溝手拵なし
128	5.4*5.5	312	○	○	○	桁/母屋?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@62.8/両側溝、下面はは老穴1コ
129	5.4*5.6	262 a	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/1本溝/両側溝内部手拵なし、下面はは老穴1コ/小穴列@8.8
130	5.4*5.7	259	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/1本溝/両側溝内部手拵なし、下面はは老穴1コ/小穴列@8.8
131	5.4*5.7	262 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴2コ/両側溝手拵なし/釘跡列@15.5、下面はは老穴2コ
132	5.4*5.8	270 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/両側溝手拵なし、下面はは老穴1コ
133	5.4*5.8	270 c	○	○	○	軒枅?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/1本溝/釘跡列@15.3/前溝、下面はは老穴1コ/小穴列@8.8
134	5.4*5.8	314 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/両側溝手拵なし、下面はは老穴1コ/角色
135	5.4*6.1	313 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴1コ/両側溝手拵なし、下面はは老穴1コ
136	5.4*6.1	313 c	○	○	○	束? (5.4*5.4)	4面貫穴各2コ@24.8、黒色
137	5.5*5.5	20	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝、1面横材受込1コ、1面隅材受込1コ/上部風化、面0.2
138	5.5*5.5	92 a	○	○	○	棟木	上面隅木受込4.5巾欠込1コ/波横材受込1コ/両側溝
139	5.5*5.5	111	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠込、1面溝欠込1コ、1面横材受込1コ/部分溝食、内面5.2
140	5.5*5.5	114	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠込、1面貫穴1コ、1面横材受込1コ、内面5.1
141	5.5*5.5	176	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴各2コ@72.2・部分1本溝/内1面横材受込2コ/内1面は老穴4コ、1面横材受込1コ、内面5.0
142	5.5*5.5	178	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝・溝外無風化/斜め溝欠込、1面溝欠込1コ/全面風化、1面横材受込1コ、内面5.1
143	5.5*5.5	179	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/内1面部分1本溝、1面大横材受込9.0成欠込1コ、1面風化、
144	5.5*5.5	183 a	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	建物、対2面貫穴列@18.0/部分1本溝、1面横材受込1コ、
145	5.5*5.5	184	○	○	○	柱 (5.5*5.5)	対2面貫穴列@18.0・1本溝・溝外無風化、2面風化
146	5.5*5.5	244	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.5/両側溝、下面はは老穴1コ
147	5.5*5.5	254 b	○	○	○	棟木?	上面はは老穴1コ/は老穴2コ@63.6/両側溝/手拵なし、下面はは老穴1コ、両側面手拵なし
148	5.5*5.5	278	○	○	○	桁/母屋	上面はは老穴4コ/波横材受込2コ@90.0/波横材受込1コ、下面はは老穴4コ、両側面手拵なし
149	5.5*5.5	285	○	○	○	桁?	上面はは老穴2コ@24.9/波横材受込1コ、下面はは老穴2コ@24.9/小は老穴列、4面手拵なし

第5表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(3)

番号	断面寸法	評価記号	変更追加	検査材	調査材	新設使用箇所	特 徴
150	5.5*5.6	301	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し/丸尺、下面柱は老穴1コ
151	5.5*5.6	126	○	○	○	柱 (5.5*5.6)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠品/内1面大横材受11.0成欠込1コ、1面溝欠込1コ、内面5.1
152	5.5*5.6	169	○	○	○	軒桁/母屋	上面垂木欠込@15.0/柱は老穴1コ、下面柱は老穴1コ/は老穴欠@15.0/1本溝、
153	5.5*5.6	193	b	○	○	柱 (5.5*5.6)	4面貫穴、対2面部分1本溝/内1面横材受欠品1コ、1面横材受欠品1コ、1面大横材受19.0成欠込1コ、内面5.1
154	5.5*5.6	371	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し/中央部手拵上、下面柱は老穴1コ
155	5.5*5.6	203	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し/中央部手拵上、下面柱は老穴1コ
156	5.5*5.7	r	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し/中央部手拵上、下面柱は老穴1コ
157	5.5*5.8	q	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し、下面柱は老穴1コ
158	5.5*5.8	a	○	○		軒桁?	上面部分1本溝/柱は老穴1コ/は老穴2コ@63.5、下面柱は老穴1コ/小穴列@6.7
159	5.5*5.8	45	○	○		梁	上面斜めは老穴1コ/面度付、下面横材欠込1コ/は老穴1コ
160	5.5*5.8	71	○	○		桁?	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ、下面柱は老穴1コ、片側面横材受欠込1コ、4面手拵上
161	5.5*5.9	247 a	○	○		桁?	上面柱は老穴2コ@60.2小1コ/は老穴2コ@63.5、下面柱は老穴2コ小1コ、上面面手拵
162	5.5*5.9	250	○	○		軒桁/母屋	上面垂木欠込(新?)@15.0/柱は老穴1コ/釘跡列@16.5、下面柱は老穴1コ/横材受欠品1コ、両側面手拵
163	5.5*6.0	b	○			桁?	上面柱は老穴2コ@63.5/面度受欠込6.1巾1コ、下面柱は老穴2コ2コ、片側面横材受欠品1コ
164	5.5*6.0	242	○	○		棟本?	上面柱は老穴2コ@60.5小1コ/は老穴2コ@63.5/両側手拵上、下面柱は老穴2コ小1コ、両側面手拵上
165	5.5*6.0	264 b	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴2コ@63.5/両側手拵上、下面柱は老穴1コ、両側面手拵上
166	5.5*6.15	269 b	○	○		軒桁/母屋	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/片落し、下面柱は老穴1コ/直横材受欠込2コ、片側面手拵上
167	5.5*6.2	117	○	○		柱 (5.5*6.2)	対2面貫穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠品、1面溝欠込1コ/風化、1面は老穴欠@18.0・1本溝/部分腐食、内面5.1
168	5.5*6.2	260	○	○		軒桁	上面垂木欠込@15.0/柱は老穴2コ@60.3小1コ/は老穴1コ/直横材受欠込1コ、下面柱は老穴2コ小1コ、両側面手拵上
169	5.5*6.3	93 b	○	○		桁?	上面横材受欠込1コ/垂木欠込1コ
170	5.5*6.3	126	○	○		隅柱 (5.5*6.3)	対2面は老穴列@18.0・1本溝/斜め溝欠品、他2面溝欠込各1コ/溝下部分風化
171	5.5*6.3	213 b	○	○		柱 (6.3*6.3?)	対2面大貫穴各3コ/内1面部分2本溝・内材材欠込1コ/内1面手拵上、内面5.75
172	5.5*6.5	183 b	○	○		桁?	4面手拵上、1面溝欠込1コ
173	5.5*6.6	269 c	○	○		軒桁/母屋	上面垂木欠込(新?)@15.0/柱は老穴1コ/は老穴2コ@63.5/片落し釘跡列@16.0、下面柱は老穴1コ/横材受欠込2コ、両側面手拵
174	5.5*6.8	281	○	○		梁	上面柱は老穴1コ/片落し部分1本溝/内側小穴列@8.4、下面柱は老穴1コ・1本溝/溝外側上溝内面手拵上、内側面手拵上
175	5.5*7.5	125	○	○		上面貫穴	上面貫穴
176	5.5*10.0	47	○	○		梁/桁	上面柱は老穴受欠込2コ@65.0
177	5.6*5.6	193 a	○	○		柱 (5.6*5.6)	対2面貫穴列@18.0・1本溝・溝外側風化/斜め溝欠品、1面溝欠込1コ/溝下部分風化、1面横材受欠込1コ
178	5.6*5.7	246	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し、下面柱は老穴1コ、上面面手拵上
179	5.6*5.7	252	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し、下面柱は老穴1コ
180	5.6*5.8	181	○	○		柱 (5.6*5.8)	対2面大貫穴各3コ/部分2本溝、1面大は老穴3コ小は老穴3コ・部分2本溝、4面内材材欠込、内面5.8(5.8)
181	5.6*6.0	275	○	○		桁?	上面貫穴、両側面手拵上
182	5.6*6.2	z	○	○		軒桁/母屋	上面垂木欠込@15.0/柱は老穴1コ、下面柱は老穴1コ/は老穴欠@15.0/1本溝、
183	5.6*6.3	245	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し/中央部手拵上、下面柱は老穴1コ/面0.35、両側面手拵上
184	5.6*6.3	249	○	○		棟本?	上面柱は老穴1コ/は老穴2コ/釘跡列@16.0/両側落し手拵上、下面柱は老穴1コ、両側面手拵上
185	5.6*6.5	263	○	○		梁	上面柱は老穴1コ/片落し部分1本溝/内側小穴列、下面柱は老穴1コ・1本溝/溝内面手拵上、内側面手拵上
186	5.7*5.7	171	○	○		柱 (5.7*5.7)	対2面貫穴列@18.0・1本溝、1面貫穴
187	5.7*5.7	92 b	○	○		柱	内側は老穴2コ、4面手拵上
188	5.7*5.8	182	○	○		柱 (5.7*5.8)	対2面大貫穴各2コ/部分2本溝、1面部分黒色/大は老穴1コ、対面大は老穴3コ/部分1本溝、内面5.8(5.7)、3面上面貫穴
189	5.7*5.9	247 b	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し手拵上、下面柱は老穴1コ、両側面手拵上
190	5.7*5.9	314 c	○	○		棟本	上面柱は老穴1コ/は老穴1コ/両側落し手拵上、下面柱は老穴1コ、両側面手拵上
191	5.7*6.0	110 a	○	○		柱 (5.7*6.0)	対2面大貫穴各4コ/部分2本溝、対2面は老穴欠/横材受欠込各1コ/内材材欠込、溝2面部分腐食
192	5.7*6.0	266	○	○		軒桁/母屋	上面柱は老穴1コ/は老穴2コ@63.5/片落し、下面柱は老穴1コ/手拵上、両側面手拵上
193	5.7*6.3	52	○	○		軒桁/母屋	上面垂木欠込@15.0/柱は老穴1コ、下面柱は老穴1コ/は老穴欠@15.0/1本溝、内側面横材受欠込1コ
194	5.7*6.3	276	○	○		棟本/軒桁?	上面柱は老穴1コ/小穴列@8.8/両側落し、下面柱は老穴1コ/小穴列@8.8、内側面横材受欠込1コ
195	5.7*6.8	192	○	○		棟本/軒桁?	上面柱は老穴1コ/1本溝/両側落し、下面柱は老穴1コ/部分小穴列/部分1本溝、内側面横材受欠込1コ
196	5.7*10.0	34	○	○		梁	4面手拵上、上面?は老穴列、下面?は老穴2コ@60.3
197	5.7*10.8	37	○	○		斜め梁?	上面斜めは老穴2コ
198	5.7*10.8	38	○	○		斜め梁?	上面斜めは老穴2コ@61.3
199	5.8*5.8	s	○	○		柱 (5.8*5.8)	対2面大貫穴各3コ/部分1本溝、3面内材材欠込、外面貫穴
200	5.8*5.8	100	○	○		桁	上面貫穴上面受欠込1コ/柱は老穴2コ@63.4/小穴列@8.5、下面柱は老穴2コ@63.4/小穴列@8.5/柱は6.4鉄線1コ
201	5.8*5.8	140	○	○		柱 (5.8*5.8)	1面は老穴列/2本溝、対面面は老穴2コ/内材材欠込2コ内法高58.0、内面5.3(5.8)
202	5.8*5.8	180	○	○		柱 (5.8*5.8)	対2面大貫穴各2コ/部分2本溝、1面部分腐食、4面内材材欠込、内面5.8(5.8)
203	5.8*5.8	282	○	○		軒桁	上面垂木欠込@15.0/柱は老穴1コ/両側落し手拵上
204	5.8*5.9	u	○	○		桁?	上面柱は老穴2コ@63.3、長尺
205	5.8*6.0	e	○	○		桁?	4面手拵上、上面は老穴1コ、下面柱は老穴2コ@63.4、長尺

第6表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(4)

番号	断面寸法	若機記号	変更追加	標記	通材	指定使用箇所	特	備
206	5.8*6.0	96	○	○	○	柱 (5.8*6.0)	対2面大貫穴各1コ/1本溝、1面大貫材受込13.0巾欠込1コ/上部腐食大、対面内材欠込1コ	
207	5.8*6.0	144	○	○	○	柱 (5.8*6.0)	対2面大貫穴各4コ/部分1本溝/内1面大貫材受込13.0巾欠込1コ/内材欠込、対2面小貫穴列・部分1本溝/内1面横材受込3コ/斜め欠込1コ、1面大貫材受込10.0巾欠込1コ/上部腐食大、対面内材欠込1コ	
208	5.8*6.0	248	○	○	○	桁?	1面柱は老穴1コ/は老穴1コ、下面柱は老穴1コ、両側面部分腐食	
209	5.8*6.0	315 b	○	○	○	柱 (5.8*6.0)	1面は老穴列@19.5、1本溝、隣面横材受込1コ、3面腐食大 (調査中所携)	
210	5.8*6.1	273 a	○	○	○	隅柱 (5.8*6.1)	対2面小穴列@5.2、隣2面風化/内1面下見板欠込 (新?)	
211	5.8*6.25	158	○	○	○	柱 (5.8*6.25)	4面貫穴各2コ@20.3、3面小穴列/内1面風化/内1面上部腐、3面内材欠込、面内5.25 (5.8)*5.75 (6.25)	
212	5.8*6.3	21	○	○	○	柱 (5.8*6.3)	4面着色、隣2面は老穴各1コ/内1面1本溝/内1面型腐	
213	5.8*6.3	172	○	○	○	外壁柱 (5.8*6.3)	対2面貫穴各2コ/部分1本溝、小穴列/斜め欠込/内材欠込、内側面内材欠込2コ/斜め長溝欠込2本	
214	5.8*6.4	318 b	○	○	○	桁	上面柱は老穴1コ/小穴列@9.0/渡横材受込1コ、下面柱は老穴1コ/小穴列@9.0	
215	5.8*6.6	272	○	○	○	棟木/軒桁?	上面柱は老穴1コ/1本溝/両側落、下面柱は老穴1コ/部分小穴列/部分1本溝、内側面横材受込1コ	
216	5.8*6.6	286 b	○	○	○	棟木/軒桁?	上面柱は老穴1コ/1本溝/両側落、下面柱は老穴1コ/小穴列@5.8/1本溝	
217	5.8*6.6	317	○	○	○	棟木/軒桁?	上面柱は老穴1コ/1本溝/両側落/歪木欠込@15.0、下面柱は老穴1コ/歪木欠込/部分小穴列/部分1本溝、内側面横材受込1コ、面内5.8 (5.3)	
218	5.9*5.9	291	○	○	○	桁?	下面? 柱は老穴1コ、片側面手拵仕上	
219	6.0*6.0	z	○	○	○	柱 (6.0*6.0)	隣2面大貫穴列/部分1本溝、1面横材受込2コ、3面内材欠込	
220	6.0*6.0	101	○	○	○	柱 (6.0*6.0)	対2面大貫穴列/1本溝、部分2本溝、対2面横材受込各1コ/内1面大貫穴列・部分2本溝、3面内材欠込、外側風化/溝欠込1コ	
221	6.0*6.0	103	○	○	○	柱 (6.0*6.0)	対2面大貫穴列/横材受込各1コ/内材欠込、対2面横材受込各1コ、隣2面一部腐食、面内5.55	
222	6.0*6.0	142	○	○	○	独立柱 (6.0*6.0)	4面内材欠込/黒色付、対2面横材受込各1コ、他2面貫穴各1コ、面内6.25	
223	6.0*6.0	151	○	○	○	柱 (6.0*6.0)	対2面貫穴/部分1本溝、1面部分1本溝/被材受込1コ、1面内材欠込、4面腐食大	
224	6.0*6.0	158	○	○	○	柱 (6.0*6.0)	対2面大貫穴列/部分1本溝、小穴列@5.5/斜め欠込1コ、3面内材欠込、外面風化/溝欠込1コ	
225	6.0*6.2	ウ	○	○	○	桁?	1面横柱老穴1コ・は老穴1コ/手拵仕上、下面着色	
226	6.0*6.2	97	○	○?	○	桁?	上面は老穴1コ/勾配・腐食大、片側面腐食大	
227	6.0*6.2	109 a	○	○	○	柱 (6.0*6.2)	対2面大貫穴列@20.0/部分2本溝/内材欠込/横材受込各1コ、対2面小貫穴列/内材欠込/被材受込各1コ	
228	6.0*6.2	129	○	○	○	外壁柱 (6.0*6.2)	対2面貫穴列@20.0/1本溝、部分2本溝、小穴列@5.5/斜め欠込各2コ/内材欠込、外面風化/溝欠込2コ、面内5.6 (6.2)	
229	6.0*6.2	152	○	○	○	柱 (6.0*6.2)	対2面大貫穴各3コ・小穴列/内1面横材受込1コ/部分腐食、面内6.57 (6.2)	
230	6.0*6.3	y	○	○	○	柱 (6.0*6.3)	対2面は老穴列@20.0/部分1本溝、小穴列/内材欠込、1面小貫穴列@20.0、1面小貫穴列/内材欠込	
231	6.0*6.3	120	○	○	○	桁?	上面柱は老穴2コ@63.5/は老穴1コ/小穴列@8.7/渡横受6.0巾欠込1コ、下面柱は老穴1コ/溝は老穴1コ/小穴列@8.7	
232	6.0*6.3	137	○	○	○	柱 (6.0*6.3)	対2面大貫穴各2コ・小穴列/内材欠込/内1面1本溝、部分2本溝、1面は老穴列・一部小穴列/内材欠込、横材受込1コ、1面小貫穴列/内材欠込/横材受込1コ	
233	6.0*6.4	コ	○	○	○	桁	上面柱は老穴1コ/部分小穴列@8.7/渡横材受6.0巾欠込1コ、下面柱は老穴1コ/小穴列@8.7、内側面横材受6.0巾欠込1コ	
234	6.0*6.4	174	○	○	○	軒桁	上面柱は老穴1コ/1本溝、小穴列@8.8/溝外腐食/両側落、下面柱は老穴1コ/1本溝/溝外腐食、内側面横材受込1コ、片側面腐食	
235	6.0*6.4	293	○	○	○	桁?	上面柱は老穴2コ@63.5/小穴列@8.7/流石土梁受8.3巾欠込1コ、下面柱は老穴2コ@63.5/溝は老穴2コ@63.5/小穴列@8.7	
236	6.0*6.5	v	○	○	○	桁	上面柱は老穴1コ/渡横材受6.0巾欠込1コ、下面柱は老穴1コ/小穴列、両側面横材受6.2巾欠込各1コ	
237	6.0*6.5	x	○	○	○	柱	対2面貫穴列@20.0/内材欠込/内1面部分1本溝、横材受込1コ/側面1本溝・部分2本溝・は老穴列、1面は老穴列/内材欠込、1面横材受込1コ/内材欠込	
238	6.0*6.5	131	○	○	○	桁	上面柱は老穴1コ/部分小穴列/渡横材受6.0巾欠込1コ、下面柱は老穴1コ/小穴列@9.5、両側面横材受6.0巾欠込2コ	
239	6.0*6.7	138	○	○	○	床梁	上面流石土梁欠込2コ@21.2/流石土梁欠込1コ	
240	6.0*6.7	160	○	○?	○	桁?	上面貫穴は老穴1コ/全面腐食、下面は老穴2コ	
241	6.0*6.7	300	○	○	○	軒桁	上面柱は老穴1コ/溝木欠込@15.5/1本溝/両側落、下面柱は老穴1コ/渡横材受欠込1コ/部分1本溝、小穴列/溝外腐食 (調査: 節材木?)、外側面風化	
242	6.0*7.0	w	○	○	○	桁	上面柱は老穴1コ/1本溝/渡横材受8.5巾欠込1コ、下面柱は老穴1コ/1本溝	
243	6.0*7.0	109 b	○	○	○	柱	上面柱は老穴1コ/渡横材受4.5巾欠込1コ/部分腐食、下面柱は老穴1コ/柱は老穴1コ、片側面部分腐食、長尺	
244	6.0*7.0	175	○	○	○	床梁	上面手拵仕上/渡横木上欠込@20.0、片側面横材受14.0巾欠込1コ	
245	6.0*6.8	7	○	○	○	桁	上面? 柱は老穴1コ/1本溝、下面? 柱は老穴1コ/1本溝、小穴列@8.7	
246	6.0*9.9	66 a	○	○	○	梁	上面1本溝	
247	6.0*10.0	26	○	○	○	受梁	上面斜めは老穴2コ	
248	6.0*10.0	35	○	○	○	梁	上面は老穴4コ	
249	6.0*10.0	39	○	○	○	梁	上面は老穴2コ@60.2	
250	6.0*10.1	40	○	○	○	梁	上面腐落、下面柱は老穴2コ@63.0、1本溝/筋溝? 受欠込1コ/縦材? 受欠込1コ、内側面横材受欠込2コ@63.0、長尺	
251	6.0*10.2	29	○	○	○	梁	下面柱は老穴2コ@60.0	
252	6.1*6.2	d	○	○	○	柱	上面柱は老穴2コ@63.4、下面横は老穴2コ、片側面腐食大	
253	6.2*6.3	124	○	○	○	柱	対2面貫穴列@20.0・2本溝/内材欠込、対2面横材受込各3コ/内材欠込、長尺、面内5.7 (6.3)	
254	6.25*6.3	173	○	○	○	柱	対2面大貫穴列@20.0・小穴列/内材欠込/部分1本溝、1面は老穴列/内材欠込/部分着色、対面大貫穴1コ/内材欠込/着色、面内5.8 (6.3)*5.85 (6.25)	

第7表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(5)

番号	断面寸法	呼称記号	変形 寸法	補修 材	取付 位置	新定使用箇所	特 徴	備 考
256	6.3*7.0	273 b	○	○		軒桁	上面柱は老穴1コ/1本溝/両側溝、下面柱は老穴1コ/部分1本溝・小穴列/露外部風化(漆剥:部材木7)、外側面風化、内側面材受欠1コ	
256	6.3*6.3	e	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴列/床板受欠1コ/内法材欠各1コ、1面床板受欠1コ、対面横材受欠1コ/内法材欠2コ、長尺	
257	6.3*6.3	f	○	○		桁	上下面柱は老穴各2コ@63.6、両側面腐食大、長尺	
258	6.3*6.3	g	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴列@20.0/部分2本溝/内1面内法材欠・裏面内法高60.0/側面腐食欠1コ・上面欠1コ・内法高56.36、1面内法材欠1コ/部分1本溝/横材受欠1コ、対面横材受欠1コ、黒色、内面5.7、長尺	
259	6.3*6.3	ク	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴各4コ/内法材欠、1面横材欠2コ/内法材欠、対面横材受欠1コ/内法材欠	
260	6.3*6.3	102	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴列/内法材欠、風腐跡/内1面土壁跡/横材受欠1コ、対2面貫穴列/内法材欠、取除内法高58.4、黒色、内面5.65	
261	6.3*6.3	103	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴列@20.0・小穴列/貫穴列@20.0/内法材欠、1面横材受欠1コ/内法材欠、対面横材受欠1コ/貫穴列@20.0/内法材欠、内面5.65、長尺	
262	6.3*6.3	121	○	○		柱 (6.3*6.3)	隣2面貫穴列@20.0/2本溝/内1面内法材欠、1面貫穴欠1コ/上面受欠1コ、隣内内法材欠1コ	
263	6.3*6.3	132	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴各4コ・小穴列・土壁跡/内法材欠、取除内法高57.0/内1面横材受欠1コ、対2面貫穴各4コ・小穴列/内法材欠/内1面土壁跡	
264	6.3*6.3	147	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴各3コ・貫穴列@20.0/内法材欠/1本溝・部分2本溝、1面横材受欠6.9欠1コ/内法材欠、取除内法高58.0、内面5.65	
265	6.3*6.3	191	○	○		柱 (6.3*6.3)	対2面貫穴各3コ・小穴列/内法材欠/内1面土壁跡・中央部黒色/側面部分1本溝、対2面貫穴各3コ・小穴列/内法材欠/内1面横材受欠4.6欠1コ、内面5.9	
266	6.3*6.4	98	○	○		桁	上面貫穴2コ、下面貫穴1コ・小穴列、手斧仕上、部分風化	
267	6.3*6.4	169	○	○		柱 (6.3*6.4)	対2面貫穴列・小穴列/内法材欠、1面貫穴列/黒色、対面部分腐食、内面5.7 (6.3)	
268	6.3*6.4	170	○	○		桁	上面貫穴1コ/横材受欠6.3欠1コ、下面貫穴1コ/貫穴1コ、手斧仕上	
269	6.3*6.5	ケ	○	○		柱 (6.3*6.5)	対2面貫穴列@20.0/部分2本溝/内法材欠/内1面貫穴、対2面貫穴列@20.0/部分2本溝/内法材欠	
270	6.3*6.6	107	○	○		桁	上面貫穴太梁受欠6.3欠1コ、下面貫穴1コ/貫穴1コ@97.0/漆部腐食、屑側面下部一部腐食、手斧仕上、長尺	
271	6.3*12.0	28	○	○		梁	野物、上面貫穴列/斜め欠1コ、下面貫穴列@20.0、片側面太梁跡、長尺	
272	6.4*6.4	i	○	○		桁	上面柱は老穴2コ@63.4、小穴列@6.5/漆剥太梁受欠0.5欠1コ、下面柱は老穴2コ@63.4、小穴列@6.5/貫穴1コ@67.0/風化、長尺	
273	6.4*6.4	104	○	○		外壁柱	対2面貫穴列・小穴列・土壁跡/内法材欠、風腐跡、1面風化、着色	
274	6.4*6.4	110 b	○	○		外壁柱	対2面貫穴列・小穴列・1本溝/内法材欠、風腐跡、1面貫穴1コ/横材受欠1コ/風化	
275	6.4*6.5	292	○	○		軒桁	上面貫穴1コ・1本溝/蓋木欠列/野物、下面柱は老穴1コ・1本溝・小穴列、内側面手斧仕上	
276	6.4*6.7	69	○	○		梁	上面貫穴は老穴1コ/面皮付、下面横材受欠1コ	
277	6.4*7.0	32	○	○		梁	上面貫穴は老穴1コ、下面横材受欠1コ	
278	6.4*7.0	33	○	○		梁	上面貫穴は老穴1コ、下面横材受欠1コ	
279	6.4*7.0	42	○	○		梁	上面貫穴は老穴1コ/面皮付、下面横材受欠1コ	
280	6.5*6.5	h	○	○		桁	上面貫穴太梁受欠6.6欠1コ、下面貫穴2コ、手斧仕上、長尺	
281	6.5*6.5	シ	○	○		梁	野物、上面貫穴2コ@90.0/貫穴列@20.0、下面貫穴2コ@90.0、側面太梁跡	
282	6.5*6.5	ス	○	○		柱	対2面貫穴列/貫穴列@19.8/内法材欠/内1面部分1本溝、対2面貫穴列/内1面貫穴1コ/上面貫穴1コ、下面貫穴1コ/貫穴1コ、手斧仕上	
283	6.5*6.5	セ	○	○		桁	上面貫穴1コ、下面貫穴1コ/貫穴1コ、手斧仕上	
284	6.5*6.5	22	○	○		柱 (6.5*6.5)	対2面貫穴列@20.0・1本溝/部分2本溝/内法材欠、貫穴欠、斜め溝欠2コ、1面横材受欠1コ、対面木切溝欠2コ/金剛風化	
285	6.5*6.5	152	○	○		桁	上面貫穴は老穴1コ/蓋材材受欠1コ、下面貫穴は老穴1コ/貫穴2コ、片側面横材受欠1コ、面皮	
286	6.5*6.8	60	○	○		野物?	上面貫穴1コ、下面貫穴、片側面貫穴1コ	
287	6.5*7.0	296 a	○	○		梁	野物、上面貫穴は老穴2コ、下面貫穴は老穴2コ・貫穴2コ、片側面横材受欠1コ、面皮	
288	6.6*6.6	53	○	○		梁	野物、上面貫穴は老穴2コ@60.0/貫穴列@20.0、下面貫穴は老穴2コ、面皮	
289	6.6*6.6	145	○	○		桁	上面貫穴は老穴1コ・小穴列/蓋材受欠0.9欠1コ@97.0、下面貫穴1コ・貫穴1コ、長尺	
290	6.6*6.8	306	○	○		梁	上面貫穴太梁欠1コ、下面貫穴列、上面面手斧仕上	
291	6.6*9.9	74	○	○		桁	上面貫穴1コ	
292	6.6*7.7	56	○	○		梁	野物、面皮、上下面貫穴列@20.0/上面3.0*3.0風化1コ	
293	6.6*7.8	68	○	○		梁	野物、面皮	
294	6.6*8.0	72	○	○		梁	野物、面皮	
295	6.6*10.5	30	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0	
296	7.0*7.0	62	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
297	7.0*7.5	25	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
298	7.0*8.0	43	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
299	7.0*8.3	73	○	○		野物	古仕口腐無し	
300	7.0*8.5	j	○	○		桁	上下面貫穴は老穴各2コ@63.0、長尺	
301	7.0*9.9	51	○	○		桁	上下面貫穴列@20.0/上面腐食	
302	7.1*7.3	70 a	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
303	7.1*7.5	31	○	○		梁	上面貫穴、下面横材材欠1コ	
304	7.1*7.8	46	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
305	7.1*8.0	75	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0	
306	7.2*7.7	48	○	○		梁	下面横材材欠2コ@60.0	
307	7.3*7.8	57	○	○		梁	下面横材材欠1コ	
308	7.6*8.0	41	○	○		梁?	上面貫穴材欠2コ/腐食	
309	7.7*11.4	44	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0	
310	7.8*9.0	35	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0/柱注漬	
311	7.8*11.4	27	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0	
312	8.2*8.5	65 b	○	○		桁	上面貫穴太梁受欠2コ	
313	8.2*8.5	79 b	○	○		桁?	角欠1コ	
314	8.2*10.8	54	○	○		梁	上面貫穴2コ@60.0/面皮	

第8表 旧松城小学校解体古材再調査部材リスト(6)

2、松前福山城史跡地内植生調査にあたって

松前町文化財保護審議会委員 狸々利勝

町教委から史跡地内の植生調査について来意があった、以前より山草に興味があり、自宅周辺にも各種山野草が植生していることと、自宅から史跡まで徒歩10数分の近距離にあることからこの調査を受けることとした。

植生調査にあたって教委から

1. 調査範囲は史跡地区内全地とする。
2. 竹木類は、調査済であるので今回は調査不要であること。
3. 調査の事務的利便から交付貸出されたもの。

(1)松前町現況、地番重ね図(史跡指定地内1/1,000 1/500図)各3部

(2)参考図書(「道南の野の花」故玉木忠氏)1冊貸し出し

(3)画板1枚貸し出し

(4)カメラ用フィルム(36枚撮メモ的に使用されたいとの配慮から)3本

以上が教委からの事項である。

実調にあたっては、特別な専門的調査方法があるとおもいますが、自分なりに次のことを基本として、調査を進めることとした。

1. 調査対象植物

(1)山野草とする。社寺、境内、住家等史跡地内での花畑や当地方の山野に植生していないと思われるもので、他から移植培養されているものは、調査の対象外とする(例スズラン等)但し当地方の山野には自然的には、生育していないが相当以前から自然的状態で生育しているものは、調査対象とする。

(例二葉アオイ、白花タンポポ等)

(2)芝、イネ科の植物については、次の機会の調査とする。

(3)雪解時期に開花するものは、今回は確認出来ないので明春の再調査を要する。

(例 福寿草、ミズバショウ、ザゼンソウ等)

2. 史跡地内の分割調査

(1)史跡地内を8周辺地区に分割し、更に1周辺地区を数地点に分類地区として調査進行する。

(2)分割図

分割調査図は、教委から交付された前記地番重ね図の1/1,000図を使用。

3. その他

(1)重複調査の防止と、作業の進捗を計るため、概要調査に基づく植物名と近隣の状況から植生されていると、予想される植物名をア、イ、ウ、エ、オ、順の一覧表を作成し、周辺区毎に実調により植生確認のものを、○で囲むこととした。(追加記載共)

(2)現地での名称不明のものは、標本採取後日決定することとする。



4. 実施調査結果

8周辺地区に分割して調査した調査地内は社寺境内墓地、一般開放の観光、観桜園地であるので、始終草刈除草作業がなされていること等から、開花時に確認しようとしても困難であった等から、今回だけの調査では確定出来ないものもあるので、今後の補正を要する。

雑記

ユリ科オオウバユリ

市街地近くの史跡地内に群生状態で植生して、7月～8月に緑白色の花を多数水平状で咲いている様子が見事である。相当の年数を経ているものが多く、20個近くの花をつけているものもある。花後の果実は褐色でこれもまた見事である。現地保護保存を要すると思う。

ウマノスズクサ科フタバアオイ

史跡地内の極く限られた一部の地内だけに自然状態で植生している稀少植生であるが、江戸時代の将軍徳川家、徳川御三家の紋章は「葵」の紋として有名であり、尾州名古屋、尾張大納言61万9千石、紀州和歌山紀伊中納言55万5千石、常州水戸、水戸中納言35万石の家紋としての葵が松前福山城跡史跡地内に植生していることは、藩政時代の何時か意図的に持込まれて今日に至っているものと推意される。

また徳川家の紋章、三葉の葵紋は二葉葵を圖案化したものと聞く葵紋章としては、外に立葵紋、五つ剣葵紋がある。

京都賀茂神社の祭りは毎年5月15日に行なわれるが、葵祭りとしてテレビでも放映され、有名である。

いづれにしてもこのフタバアオイは、稀少植物として保護手段を講ずべきものとあろう。土砂崩れにより滅失しそうな箇所もある。

ア	アカソ、アキタブキ、アサツキ、アオミズ、	テ	ドクダミ、
イ	イラクサ、	ト	ナズナ、
ウ		ニ	ニリンソウ、
エ	エゾアザミ、エゾイチゲ、エゾエンゴサク、	ヌ	
	エゾニユウ、エゾノギシギシ、エゾトリカブト、	ネ	
オ	オオイタドリ、オオウバユリ、オオバコ、	ノ	ノボロギク、
	オオヨモギ、オドリコソウ、	ハ	バイケイソウ、ハコベ、
カ		ヒ	ヒメオドリコソウ、ヒメジョオン、
キ	キツリフネ、キクザキイチゲ、ギジムシロ、キバナノアマナ	フ	フタバアオイ、フウロソウ、
ク	キシヨウブ、クサソチツ、クサフジ、クルマバソウ	ヘ	ヘビイチゴ、ヘラオオバコ、
ケ	ゲンノショウコ、	ホ	
コ		マ	マツヨイグサ、
サ		ミ	ミズヒキ、ミゾソバ、ミツバ、
シ	シヤク、シロバナタンポポ、	ム	ムラサキキケマン、
ス	スイバ、スギナ、	メ	
	セイヨウタンポポ、セリ、	モ	
ソ		ヤ	
タ	タチツボスミレ、	ユ	
チ		ヨ	
ツ	ツユクサ、ツルボ、	ワ	

第9表 植生調査表



1. 周辺区：阿吽寺桜見本園周辺 (1)史跡指定北端傾斜地

アカソ、アキタブキ、アオミズ、エゾニユウ、エゾノトリカブト、オオイタ、ドリ、オオウバユリ、オオバコ、オオヨモギ、カキドオシ、キクザキイチゲ、クサソテツ、クルマバソウ、シャク、スイバ、タチツボスミレ、ツユクサ、ドクダミ、ハコベ、ヒメジョオン、フタバアオイ、ミズヒキ、ミゾソバ、ムラサ、キキケマン、ユキノシタ、



1. 周辺区：阿吽寺桜見本園周辺 (2)桜見本園地

アキタブキ、アサツキ、エゾイチゲ、エゾニユウ、エゾノギシギシ、オオバユリ、オオバコ、オオヨモギ、オドリコソウ、カタクリ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、ゲンノシウゴ、シャク、スイバ、セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、ツユクサ、ドクダミ、ナズナ、ニリンソウ、バイケイソウ、ヒメオドリコソウ、ヒメジョオン、ミゾソバ、ミツバ、ムラサキキケマン、ヤブカンゾウ、



1. 周辺区：阿吽寺桜見本園周辺 (3)阿吽寺境内

アサツキ、エゾアザミ、エゾイチゲ、エゾノギシギシ、オオウバユリ、オドリコソウ、カキドオシ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、シャク、スイバ、スギナ、セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、ツルボ、ドクダミ、ナズナ、ニリンソウ、ヘビイチゴ、ミツバ、ヤブカンゾウ、



1. 周辺区：阿吽寺桜見本園周辺 (4)新坂斜面地

アキタブキ、エゾノトリカブト、オオイタドリ、オオウバユリ、オオバコ、オオヨモギ、オドリコソウ、カキドオシ、キバナノアマナ、キツリフネ、ゲンノシウゴ、シャク、ドクダミ、ハコベ、ヒメジョオン、フタバアオイ、ミゾソバ、ヤブカンゾウ、



2. 周辺区：桜資料館、法源寺周辺 (1)桜資料館周辺

エゾイチゲ、エゾノギシギシ、オオバユリ、オオバコ、オドリコソウ、カキドオシ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、シャク、スイバ、セイヨウタンポポ、ドクダミ、ナズナ、ニリンソウ、ハコベ、ヒメオドリコソウ、ヘビイチゴ



2. 周辺区：桜資料館、法源寺周辺 (2)法源寺、寿養寺跡周辺

アキタブキ、エゾイチゲ、エゾニユウ、エゾノギシギシ、オオバユリ、オオバコ、オドリコソウ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、ゲンノショウコ、シヤク、スギナ、セイヨウタンポポ、ドクダミ、ナズナ、ニリンソウ、ヒメオドリコソウ、ヘラオオバコ、ミツバ、ヤブカンゾウ、



3. 周辺区：松前神社周辺

アサツキ、エゾアザミ、エゾイチゲ、エゾニユウ、エゾノギシギシ、オオバユリ、オオバコ、オオヨモギ、オドリコソウ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、シヤク、スイバ、セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、ドクダミ、ニリンソウ、ヒメジョオン、ヤブカンゾウ、



4. 周辺区：法幢寺、龍雲院周辺 (1)法幢寺境内、墓地周辺(史跡松前藩主松前基所)

アサツキ、エゾイチゲ、エゾエンゴサクエゾニユウ、オオイトドリ、オオバユリ、オオバコ、オドリコソウ、カタバミ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、シヤク、セイヨウタンポポ、ツエクサ、ドクダミ、ニリンソウ、ノボロギク、ハコベ、ヒメオドリコソウ、ヒメジョオン、ヘラオオバコ、ミズヒキ、ミゾソバ、ムラサキキケマン、ヤブカンゾウ、ユキノシタ、



4. 周辺区：法幢寺、龍雲院周辺 (2)龍雲院境内墓地

アキタブキ、エゾイチゲ、エゾニユウ、オオバコ、オドリコソウ、カタクリキバナノアマナ、シヤク、シロバナタンポポ、スギナ、セイヨウタンポポ、ドクダミ、ニリンソウ、ハコベ、ヒメオドリコソウ、ムラサキキケマン、



5. 周辺区：福山城本丸、池沼周辺 (1)天守閣、本丸御殿跡、観瀾台周辺

イラクサ、エゾアザミ、エゾニユウ、エゾノギシギシ、オオバコ、シヤク、シロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、ドクダミ、ナズナ、ハコベ、ヒメジョオン、ヘラオオバコ、ミツバ、



5. 周辺区：福山城本丸、池沼周辺 (2)池沼、周辺

アキタブキ、アサツキ、エゾアザミ、エゾイチゲ、エゾノギシギシ、エゾノトリカブト、オオバユリ、オオバコ、カキドオシ、ガマ、キクザキイチゲ、キジムシロ、キバナノアマナ、キシヨウブ、クサフジ、シャク、セイヨウタンポポ、セリ、タチツボスミレ、ドクダミ、ニリンソウ、ノボロギク、バイケイソウ、ハコベ、ヒメジョオン、フウロソウ、ヘビイチゴ、マツヨイグサ、ミゾソバ、ミツバ、ヤブカンゾウ、



6. 周辺区：八重亭跡、外濠線南地区

アキタブキ、エゾアザミ、エゾニユウ、エゾノギシギシ、オオイタドリ、オオウバユリ、オオバコ、オオヨモギ、オドリコソウ、カキドオシ、キバナノアマナ、ゲンノショウコ、シャク、スギナ、セイヨウタンポポ、セリ、タチツボスミレ、ツユクサ、ドクダミ、ノボロギク、ハコベ、ヒメオドリコ、ヒメジョオン、マツヨイグサ、ミツバ、マラサキキケマン、ヤブカンゾウ、



7. 周辺区：天神坂、三ノ丸周辺地区

エゾアザミ、エゾイチゲ、エゾノギシギシ、オオイタドリ、オオバコ、オオヨモギ、カキドオシ、キバナノアマナ、ゲンノショウコ、スギナ、セイヨウタンポポ、ドクダミ、ニリンソウ、ミツバ、



8. 周辺区：馬坂、三ノ丸周辺

エゾイチゲ、エゾニユウ、オオイタドリ、オオウバユリ、オオバコ、オドリコソウ、カキドオシ、キクザキイチゲ、キバナノアマナ、ゲンノショウコ、シャク、スギナ、セイヨウタンポポ、ドクダミ、ナズナ、ニリンソウ、ヒメオドリコソウ、ミツバ、

Ⅳ ま と め

今年度の遺構確認調査のポイントは追手二ノ門と埋門の検出にあった。次に、主だった成果について簡単にまとめる。

二ノ門跡から出土した礎盤には、礎石の乗っていた痕（アタリ痕）があった。この発見によって、礎盤と礎石によって門柱の基礎としていたことが判明した。そして、平成5年度に天神坂門の調査を行い、その時に門柱部分から出土したグリーンタフの平石を礎石と考えていたが、今回の発見により、この平石は礎盤として考え直さなければならない可能性がでてきた。このことが、後述する写真解析に大きな影響を与えることになった。

埋門については、意外な結果となった。埋門をとる昇形土居をはさんだ両側の平場の2尺のレベル差でこうなったのかは判らないが、土層観察の結果からは、門の内側は石垣で閉じられていたと考えられる。また、門の扉は、内側の石垣の根掘りの位置からして、完全ではないにしろ、内側に開くことは出来たものと思われる。

井戸廻りについては、石裂井戸枠が発見されたことはもっけの幸いであるが、それ以上に井戸西側石垣が、「松前神社所蔵線図」と同様の規模・構造で現存していたことの意義は大きい。これによって、それぞれの平場の高低差が判明すると共にそれぞれの標高が確定できた。

外堀廻りについては、今回調査するまではこれほど標高が低いことを、あまり意識していなかった。B. M. を設定するためレベルトラバースを組んだが二度も測量し直した。調査の結果、「水戸違い」が複数存在する可能性がある。また、当時のこの部分の水深は、ヘドロの上面から約3尺以上はあったと考えられる。3尺では浅いと思われるが、その下に2尺のヘドロ層があるので、防御の役目は果たしていたと言える。

今年度の整備事業では、各種調査で報告した御殿使用古材調査とともに古写真解析土層標高計測を行った。この事業は来年度も継続して実施が予定されているので、今回は予報としてそのあらましを述べる。

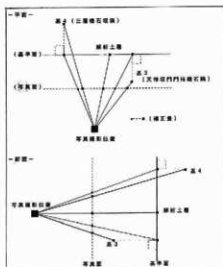
1. 概 要 慶応3（1867）年に撮影されたとされる、「福山城全景」（市立図書館図書館所蔵）写真の、画面中央の天神坂門の棟の後ろに写っている二ノ丸土居の角の標高を求めるとし、基準点を天守櫓台石垣隅と、天神坂門門柱礎石隅に置き、①の流れ図のとおり作業を進めた。この基準点の座標値を測量し、古写真の同点を指針しデジタイズし、地上座標系と写真座標系の関係を確立（単写真標定）し、土居の標高値を求めるとの点の写真座標を補正②した。

2. 結 果 ②により求めた座標値と標高値を用いて、求点（二ノ丸土居隅）の標高値を比例計算③により求めた。その結果 $h = 5.920\text{m}$ となり、基準点3の標高15.327mを加えると土居標高が21.247mとなった。

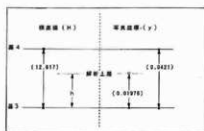
3. 問題点 発掘調査の成果をもとに、松前町史跡福山城整備検討委員会委員の大菅昭芳先生に復元モデル④を作成していただいた。復元モデルでの想定標高との差は0.282m想定標高の方が高かった。また、写真の求点を変えて同



①作業流れ図



②補正概念図



③比例概念図



④福山城ノ丸三ノ丸南東部復元モデル

じ土居の2点を標定しても同じような割合で差が生じた。

このことから基点そのものに誤りがある可能性がでてきた。天神坂門の礎石と考えていたグリーンタフの平石は、今年度調査し発見した二ノ門のように、礎石ではなく礎盤であって、写真の礎石部分は、さらに高い位置にあった可能性が生じた。

4. 課題 今後の作業としては、発掘調査のデータを座標に起こし、奥行き補正の精度を高めることや、古写真に写っている遺構の相対標高差と、想定する標高差とを比較することによって、写真の歪みや傾きを補正し、写真標定の精度を高めることが出来る、などが挙げられる。

このように今年度の解析をおこなった。来年度はその課題の作業をおこない、その結果を報告することとしたい。

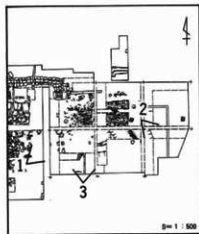
以上のように今年度の調査を終了し、数多くの成果とそれと同じぐらいの問題点も得ることが出来た。また、確認した遺構であっても新発見によって覆るものもある。今回の写真解析にかかわる問題はそうした一例であった。

さて、今後の調査においては、実測図の作成方法はもとより、実測値を正確に計測し記入していかなければならないことを痛感している。一般に考古学では1/20の実測図面の作成がおこなわれており、作図時に1mm違えば2cmの誤差が生じてしまう。特に、建物に係わる地下遺構の実測などの場合は、1/20の実測図とともに、その遺構の実際の計測値をミリ単位で図面に記入していく必要がある。このことが遺構を復元をする場合に非常に重要となってくる。また、発掘調査では調査開始前にグリッドを設定し、実測作業は調査終了間際である。この間にグリッドを設定した杭がずれる。城郭のような一つの巨大遺構の場合、個々の遺構の規模が数十メートルに及ぶことも少なくないので、要所はスチールテープで計測し、その実測値を図面に記入しておいた方が安全と思われる。

来年度の調査は、外堀の継続調査と、台場、馬出し部分の調査を予定している。石垣修理が主体の整備事業となる。また、来年度は集中整備にむけて、基本設計を作成する予定である。いよいよ本格的な整備にむけて動きだそうとしている。

最後に、文化庁ならびに史跡整備検討委員会委員の方々、関係各位のご指導とご助言に感謝致しますとともに、お礼申し上げます。

写 真 图 版



1. ▷調査風景



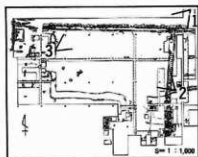
2. ▷調査区内に堆積している砂利は、城取り壊し後に、盛り土のために敷かれた。



3. ▷上部の砂利層も2と同様盛り土のため。この部分は砂利を敷く以前、城取り壊し後に、階段があったのかも知れない。



図版2 追手升形廻り



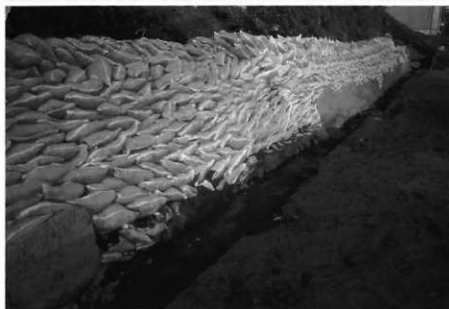
1. ▷調査前の状況

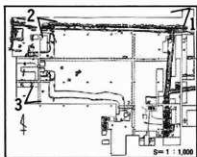


2. ▷調査状況



3▷、調査終了状況。石垣と法面
擁護のため土嚢を約3,000袋積ん
だ。





1. ▷手前の開渠に暗渠の香口が見える。平場全体が左手奥の二ノ門に向かって、緩やかに傾斜しているのが判る。



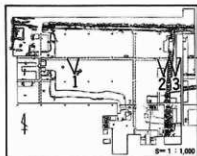
2. ▷中央奥が二ノ門、右手が堀門である。



3. ▷手前左手が堀門で、正面建物（松前地方事務局）の手前右に追手門波櫓があった。波櫓の棟高は見えている建物の屋根より高い。



図版4 追手升形（平場土層断面）



1. ▷上面の砂利層が福山城期地表面であり、その下にロームの混ざった盛り土層がある。さらにその下の、薄く張った砂利とローム層が福山館期の地表面で、その下に岩盤の砕けた土層が堆積する。

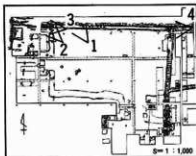


2. ▷暗渠は築城時に盛り土を行ってから、それを掘り込み構築している。



3. ▷中位のローム層と薄い砂利層が福山城期地表面であり、暗渠の壺はその下に隠れる。





1. ▷廃城後掘り起こされ、旧石垣に石積みをして、何らかの施設を構築したようだ。



2. ▷開渠の西端は暗渠に通じ、暗渠から排水が流れ込む。埋門を通る土居の北端でもある。

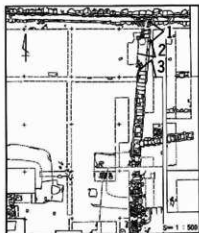


4. △平地→石垣→開渠の順に構築したが、石垣裏石のハツリ面と土層観察から判った。

3. ▷暗渠の左手に築城時の木製の遺構（トイ）が発見された。



図版6 追手升形(暗渠1)



1. ▷暗渠の呑口部で、取り壊し時に蓋が持ち去られた。中央左側の平石は城期地表向上にある。

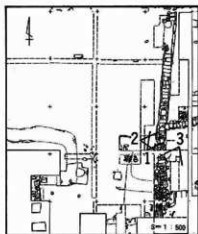


2. ▷暗渠の下位に埋め軸が発見された。上部の堆積土から福山館期のもものと判明した。上部の平石との因果関係は無い。



3. ▷備石に切り石を用い、整然と組まれている。蓋は平場全体の地表面に張られるロームに隠されてしまう。





1. ▷右手から接続する暗渠は追手門の土間を通る暗渠である。



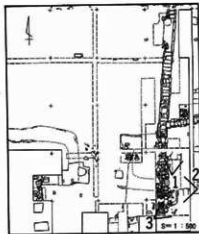
2. ▷自然石の鋪石部の上には、外堀沿いの土居の内側の石垣根石が乗っていたと思われる。



3. ▷土居の内部にある暗渠の状態。取り壊しによって乱されたのではない。



図版8 追手升形(暗渠3)



1. ▷地山のロームを切って掘り込まれているのが、福山館期の囲堀(図版15-3の番所の右側)と思われる。左は暗渠の蓋石。



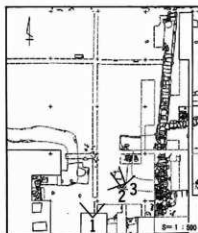
2. ▷左半の暗渠の上面は取り壊しによってやや削られている。



4. △手前左に底板が見える。ゴロタ石が多く認められるのは福山館期野面石垣裏込めのなごりであろうか。築城時には更に小さい海砂利を用いている。

3. ▷柄鐵は中央部手前の法面から発見された。





1. ▷正面に見る地表面は、取り壊しによって上面が削られた残り面で、旧地表面ではない。



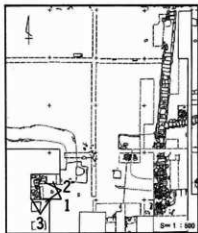
2. ▷正面の土層面にロームを掘り込んだ円輪石組の痕跡が認められる。手前の平石は正面右側の門柱礎石の下に敷いた礎盤である。



3. ▷礎盤にうっすらと礎石のアタリ痕が認められる。



図版10 追手升形（二ノ門2）



1. ▷正面の石垣面に入隅の石垣のアタリ痕が認められる。手前は旧地表面である。

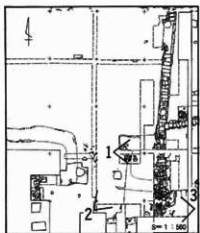


2. ▷横石の下には栗石を入れずに積み上げている。



3. ▷正面の土層面は裏込めの堆積状況を示している。





1. ▷土層面から石垣抜き取り痕が見とれる。手前右側には石垣石の碎片が栗石として敷かれている。



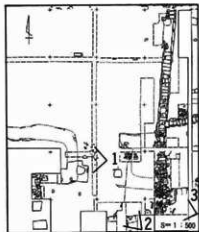
2. ▷木の生えている土手を中心に裏込め砂利が巡っていることが判る。



3. ▷裏込め砂利がこちら側まで巡っていることが土層面で判る。手前に見えるゴロタ石と裏込め砂利との大きさの違いがはっきりと判る。



図版12 追手升形（二ノ門4）



1. ▷土間敷石の下地砂の堆積状況。杭穴に砂が堆積していた。

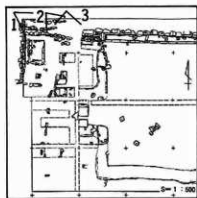


2. ▷土層面中央の砂利層が、取り壊し時に崩れずに残った面である。手前の土層面は、ほとんどが取り壊し後に堆積したものの。



3. ▷調査状況。調査をしている作業員の頭上で、ベルトコンベアーが排土を運んでいる。





1. ▷樹木が無ければ正面に北海道最南端の白神岬を見通せる。
右手の樹木の間に、うっすらと津軽の龍飛岬が見える。



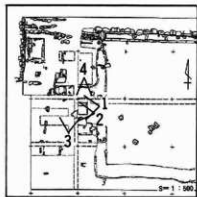
2. ▷こうした土層観察用の碑はこのまま埋め戻して保存し、また、なるべく遺構の破壊を少なくする調査に心掛けている。なぜならば、たとえ復元されたとしても将来的には何れ崩れる。それを復元する際に必要な、オリジナルの情報をなるべく多く残しておきたいからである。



3. ▷縄張り図があるので、要所の規模・構造が判れば、その部分全体を推定することが可能となる箇所が少ない。



図版14 追手升形（埋門）



1. ▷中央の砂利層は石垣表込めが崩れたもので、その下に地表面がある。埋門の下はタタキ土間であったことが判る。

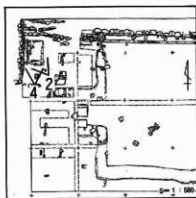
2. ▷畔の上面がタタキ土間でその後に平石が据えられていた。右側は平石の抜き取り穴と考えられる。



4. △門柱の根掘りに礎盤が残っていた。

3. ▷左側の土層面の表込め砂利に門みは抜き取り痕であり、これより上部に2)のような平場が発見されなかったことから、門面は石垣で塞がっていたであろうと考えられる。





1. ▷欠き底の規模が、福山館期の井戸枠の大きさとされる。



2. ▷奥右側の切り石は城期の暗渠が埋設され、右側が館期の野面石垣と思われる。

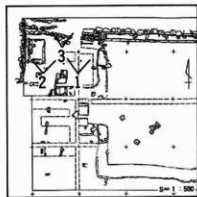


4. △左側に接して石製井戸枠が埋設されていた。地下からの湧水は少なく、ほとんどが暗渠と石垣間から出てくる。地元の人「御前水」と称し、城近まで飲んでたと云う。

3. ▷館期絵図で左側に井戸、右側に開渠がある。



【松前自沖口至奉行所園】のうち「番所」と「武器蔵」 国立公文書館内閣文庫所蔵



1. ▷右側の入扉は、多門の法面側を先に積み上げ埋門の土居を張り合わせたため、天端が土層中に認められないが、左側の野面積には石垣天端が認められた。

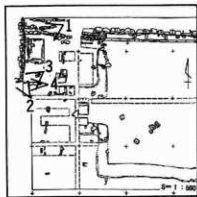


2. ▷福山城期の野面積石垣が部分的に残っていた。手前の石垣は右から二石目までは福山城期の可能性もあるが、他は判らない。野面積最上部の右端にあるグリーンタフの切り石の上面が石垣天端と考えられ、埋門を通る土居の西側の平地から6尺積み上げていることが判明した。



3. ▷埋門を通る土居天端の断面を見ていることになる。石積みの際、合場などを加工する時に排出される砕片は、裏込めに層を成して堆積することを過去の調査で確認している。したがってこの最上位の砕片層は、天端調整時に堆積したと考えられる。なお、この土居上の土層は、法面を登り、多門槽の南西隅に取り付くことが「松前神社所蔵絵図」（資料2）から判明する。





1. ▷上部と下部では、石の積み方と面の加工が異なっているのがはっきりと判る。

2. ▷出隅部である。近代のコンクリート擁壁のせいで、一石残っていた。合場に沿って面をハツリ、中央を調整せずに残す、特徴的な加工である。

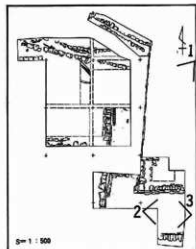


4. △出隅の左側に並ぶ石は、石垣面とラインが若干異なり時期が違うのかも知れない。

3. ▷出隅から手前左下に延びる石列は加工方法などから、石垣と同時期で、この石列の奥を、井戸廻りの平場より一段高くするための縁石と考えられる。



図版18 外堀（土層堆積状況）

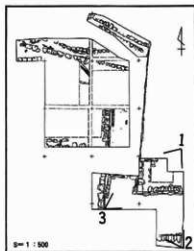


1. ▷石垣上から撮影しているが、この石垣は明治以降に構築されたもので、絵図によればタタキ土居あるいは芝土居であったと思われる。

2. ▷上半の岩や砂利の混ざった土層は城取り崩し時とそれ以降に堆積したもので、下半の上面が取り崩し直前の基底である。

3. ▷石垣石は地山岩盤に直に据えられているところもあれば写真の奥の石垣のように粘土層に据えられるところもある。





1. ▷二の丸側の石垣は出隅で折れ「堀廻」方向に続いており、築城当時の石垣が残っていることが判明した。



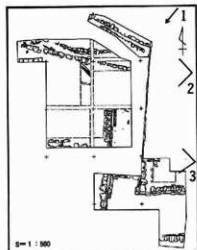
2. ▷堀取り壊し時の堀底は、残っている石垣の下から二石目の中位ぐらいで、中央奥の「堀廻」の現在の水位と比較すると、水深が3尺以上はあったと考えられる。右手奥の石垣は堀取り壊し以降に積まれたものである。



3. ▷出隅石垣の葺木積みの様子が良く判る



図版20 外堀（呑口）



1、▷「照壁」の水をせき止めるかのように何列も石垣が築かれた。

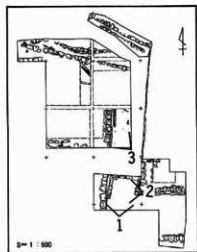


2、▷右側からコンクリート打ち排水溝、長く二列並んだ右側が明治以降石垣、左側が築城時石垣であるが、畔を越えた手前側は後世のものかも知れない。奥に短く見えるのは明治以降の建物遺構に係わる石列である。



3、▷城取り壊し時の掘底レベルは、石垣に沿って渡している木材の上面よりやや下である。





1、▷下半の黒色土層のうち上部は築城後に堆積したヘドロ層で下部は築城工事中に堆積した。

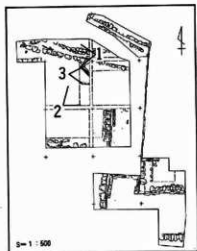


2、▷奥の土層断面中の右側に排水パイプが見えるが、この下面に築城直前の地表面があり、外堀の掘り込み面でもある。



3、▷石垣に沿って据えられた木材は石垣との間に杭土を詰め杭を打ち押さえている。木材はヘドロ層に半分埋まっている。





1. ▷取り壊し時に若干動かされているものの直線的に据えられている。右側は明治以降。



2. ▷土層断面中手前に福山館期の土層が認められる。土層の観察から、城経営中に築城時の石垣を抜き取り、もう一度作り直していることが考えられる。



3. ▷左下の柳の束（刷木か）の上に石垣が組まれていたであろうことは、裏込めにグリーンタフの砕片が含まれていることで想定出来、土層観察の結果、構築時期は築城時と考えられる。

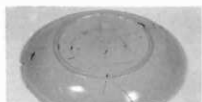




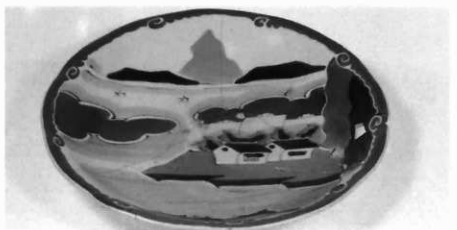
(1~9)



(10~14)



(15)



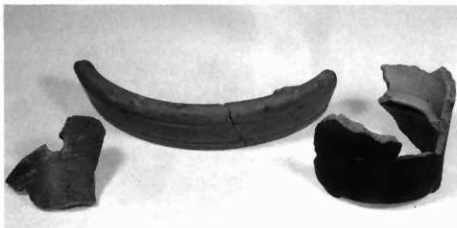
(16~18)



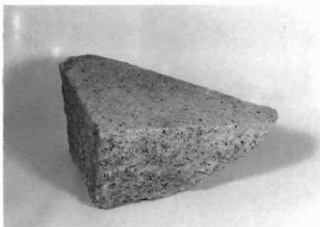
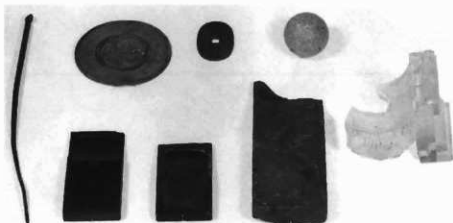
図版24 出土遺物 (19~29)



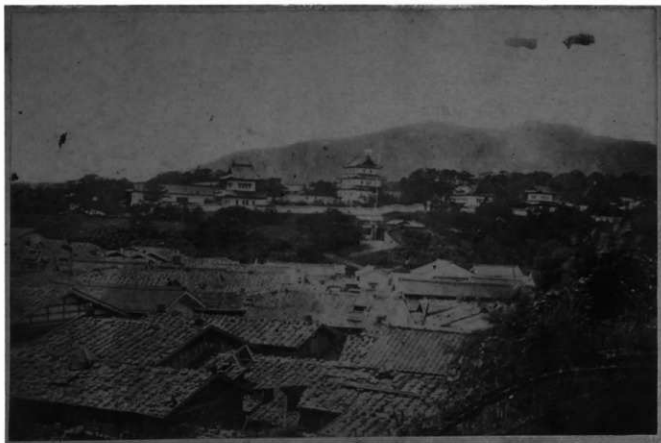
(19~21)



(22~29)

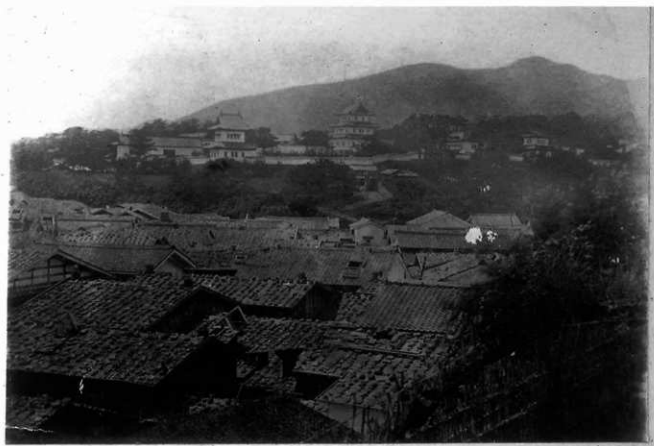


資 料 図 版

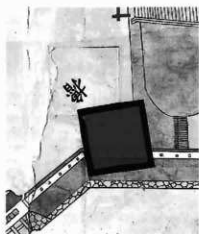


▲▼「福山城全景」

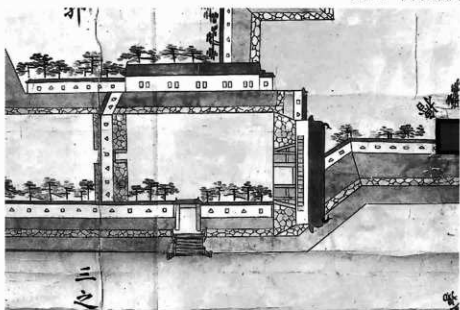
(市立函館図書館所蔵)



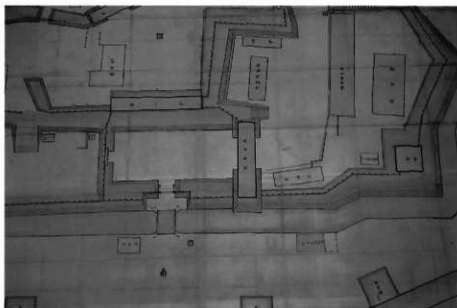
上下の写真はそれぞれ別にオリジナルを複写したもので、画角、山際、中央右側の現象ムラが異なる。



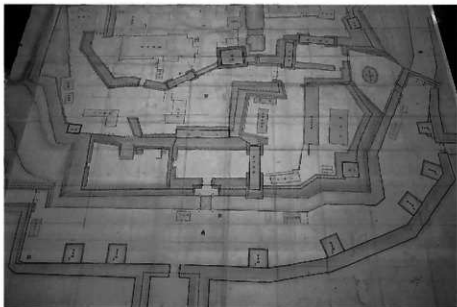
▲▼「松前城」1. 2
市立函館図書館蔵



3. 「松前神社所蔵絵図」部分



4. 同上拡大



オオバユリ



キクザキイチゲ



キジムシロ

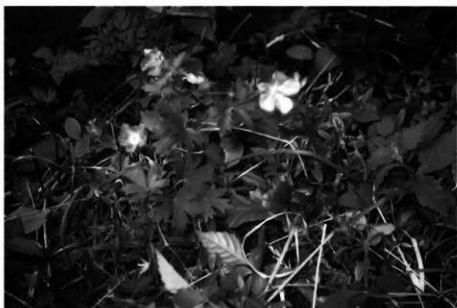




キバナノアマナ



ガマ



フクロソウ

フタバアオイ



ユキノシタ



ユキノシタ



報告書抄録

ふりがな	しせきふくやまじょう							
書名	史跡福山城Ⅹ							
副書名	平成9年度発掘調査概要報告							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号	Ⅹ							
編集者名	前田正憲							
編集機関	松前町教育委員会							
所在地	北海道松前郡松前町字神明30番地					III.01394-2-3060		
発行年月日	平成10(1998)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきふくやまじょう 史跡福山城	ほっかいどうまつまへ 北海道松前 くまづみまつまへ 郡松前町字 まつしろ 松城	01331	B-02-53	41度 25分 38秒	140度 6分 41秒	19970609 ~19971110	1,161	史跡整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡福山城	城跡	幕末	追手升形、二ノ門 、廻門、外堀		16世紀~幕末陶磁器 縄文土器石器		一部福山館期の 遺構も発見され ている。	

史跡 福山城 XV

平成9年度
発掘調査概要報告

発行：平成10年3月31日
発行者：北海道松前町教育委員会
印刷：有限会社三和印刷

史跡福山城 X V
平成 9 年度 発掘調査概要報告
電子版

2025 年 1 月 31 日 第 1 刷

発行者 北海道松前町教育委員会

〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明 30

TEL:0139-42-3060 / FAX:0139-42-2211

WEB:<https://www.town.matsumae.hokkaido.jp/bunkazai/>

MAIL:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp

底本：史跡福山城 X V 平成 9 年度 発掘調査報告書
(1998 年 北海道松前町教育委員会発行)

この電子書籍は閲覧を目的としているため、不鮮明な図版や誤字が含まれる場合があります。必要に応じて、お近くの図書館等で底本をご利用ください。